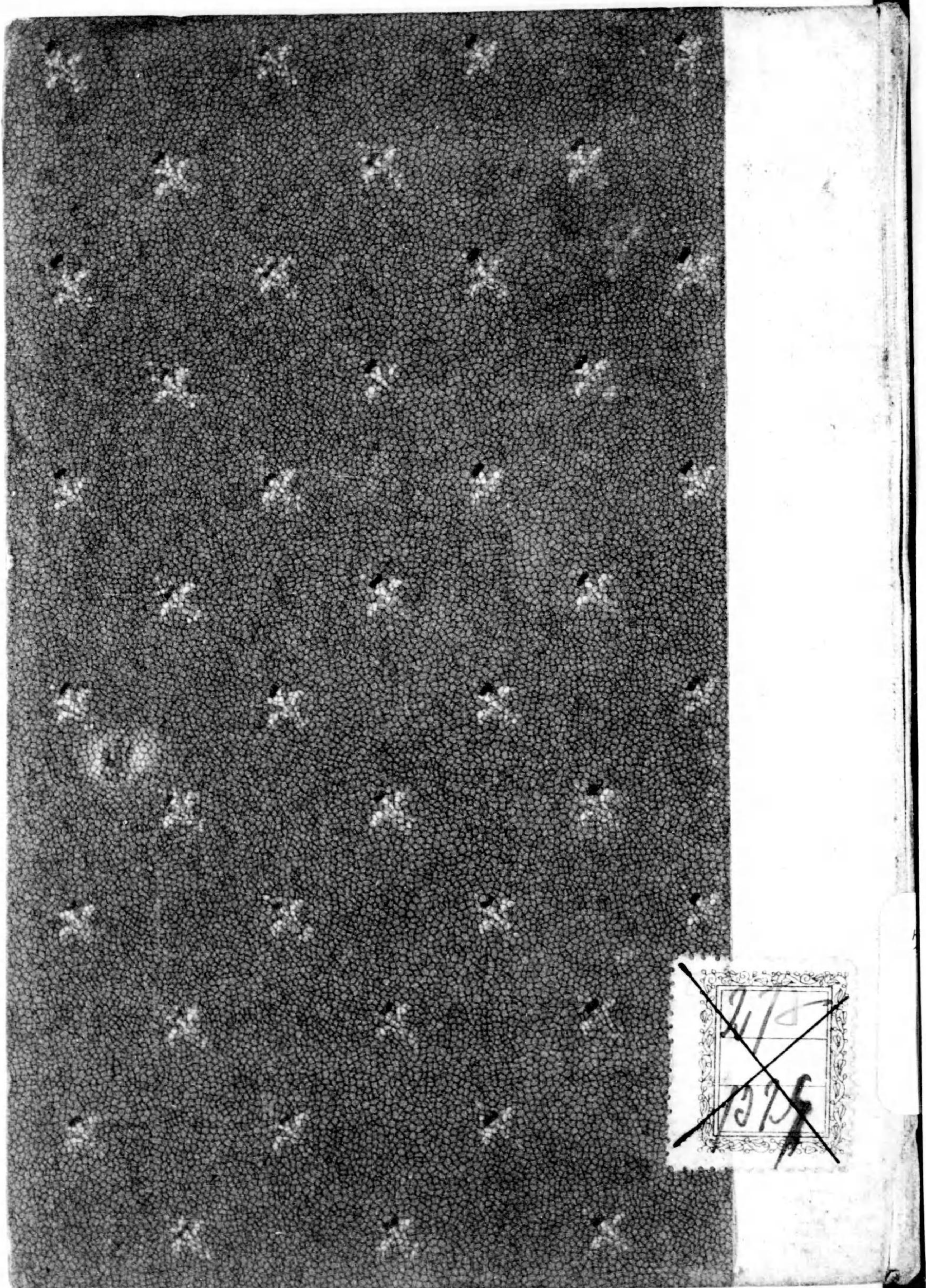
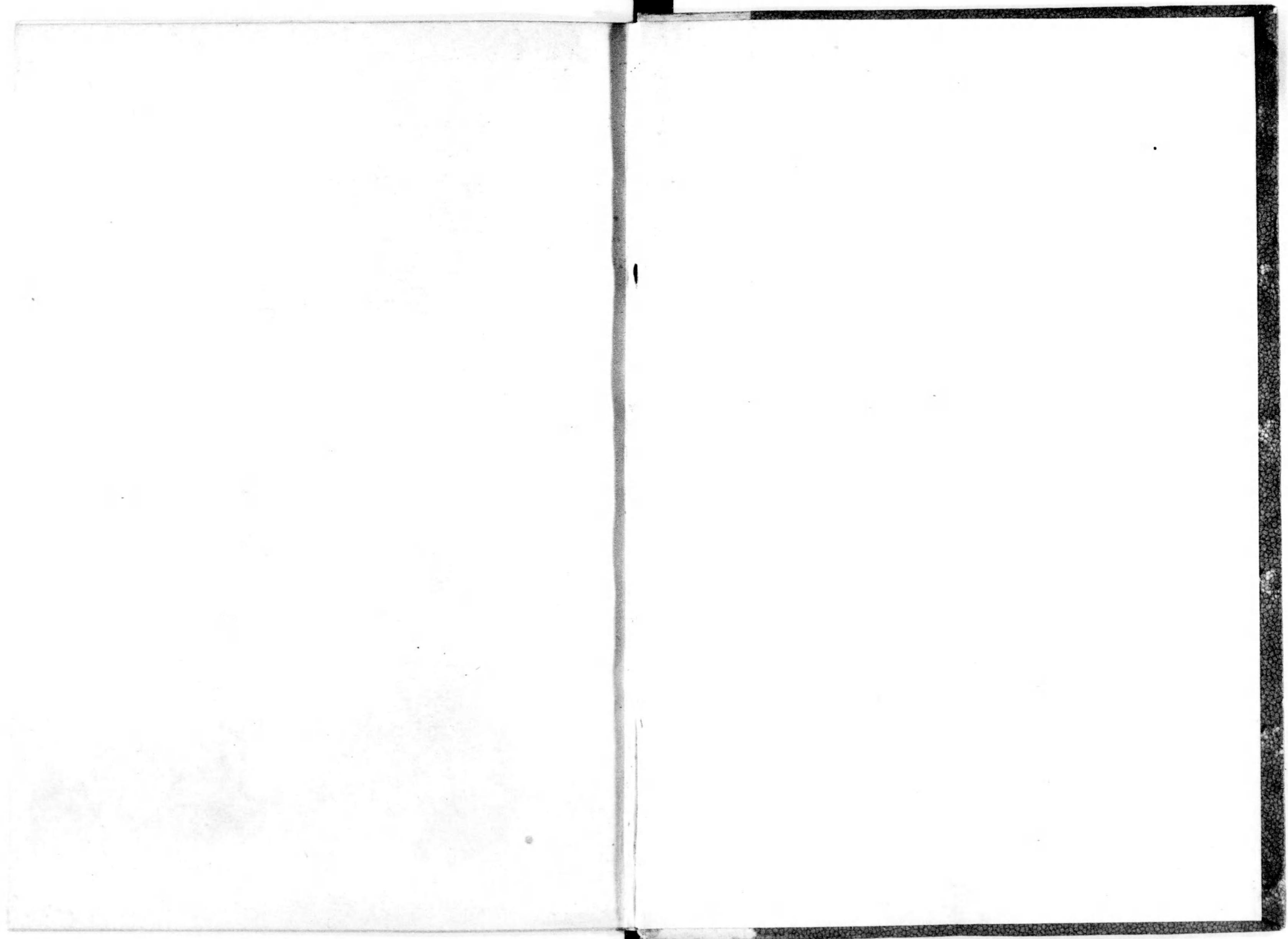


始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁸/₇₀ m 1 2 3 4 5





特100
599



島崎村
徳田藤
徳田秋
田山花
袋

編正
7.4.1
内交

自然と人生叢書
(3)

河 霧

目 次

河 霧……………一

向日葵物語……………七

葦のそよぎ……………三六

第二鎌倉夫人……………四七

鎌倉日記……………五九

湯河原へ……………六六

水 莊 記……………七六

復 讎……………一〇〇



蜥 蛎 一三二
 接吻是非 一四七
 羽指の歌 一五四
 海郷異志 一七一

河

霧

曉の河上に濛
 ふ白い霧と相
 對しながら、
 そこに人生の
 奇しき秘密の
 呷きを求め聞
 かうとしたの
 が、この一篇
 の主意であ
 る。

國木田獨歩の
 「武藏野」一巻
 は、秋から冬
 へかけての自
 然現象の微を
 描き出した
 「武藏野」を巻
 頭に、主とし
 て田園生活に

その時分私は田端の先きの、荒川の河岸に臨んだ廢屋のやうな大きな西洋館に住んでゐた。その家は父が或る事業の舊趾として残つてゐたもので、私がまだ年の若い詩人らしい空想から、好んで唯一人ここに引き移つて來たのは、二十二の冬もまだ始めの時分であつた。私はその時分かなり獨歩が好きであつた。「武藏野」と云ふ名はどんなに私の胸を躍らせたであらう。こゝも「武藏野」の一部であると云ふ事は、私をこの家に引き寄せるのに、かなり強い魅力があつた。私は「木の葉火の如く輝く」とか、「林の中に入り、草を藉いて坐し、風の音に耳を傾く。」と云つたやうな「武藏野」の中の文句に誘惑されて、自ら求め

取材した短篇
や小品が收め
られてゐる。
獨歩の詩人的
面目の躍如と
した不朽の名
著である。

て孤獨な生活に入つていつたのであるが、しかしそれは今から振り返つて見ると、かなり楽しい時代であつた。

私が自分の書齋として選んだのは、その西洋館の二階の、河に臨んだ一室で天井や壁には雨漏の痕が、異様な模様をつくつてゐた。私はそこに引き移つてから、大抵曉の光が窓から差し込んで来ない前に目を覺ました。さうしてそのまゝ寢床の中で空想に耽るか、それでなければ直ぐに飛び起きて、寐間着のまゝで河岸に佇んで、胸一杯寒い冬の黎明の空気を吸ひ込んだ。

「河霧」

さう云つた言葉は、その時分の私の心を、かなり強く動かしたものであつた。「ヴォルカの河霧」なども云つたやうなことを想像して。また事實河霧は年の若い私の詩人らしい空想を、潮のやうに押し流していつて、

低く迷ひ流れ
る河霧の思ひ
ありげな魅力
事ありげな暗
示、さうした
味ひがいか
と興味深く窺は
れるであら
う。

「河霧」と密かな宿命をもつた爺の姿が、読む者の眼前に髣髴と見え
て来る。

屢「運命」の怖ろしさなぞの暗示を與へた。さうして私は二階の自分の部屋へやの窓から、灰色に水の上を立ち罩めた河霧の影を見ながら、「黙想」や「傾聽」の時を過してゐたのであつた。もうその時分「武藏野」には「時雨」がなかつたので、私は止むなく「河霧」に「傾聽」しなければならなかつたのである。

私がそこへ引き移つてから、一月ばかり経つてからのことである。突然私の目の前に、まるであの「河霧」の中からも湧いて来たかのやうに、現はれた一人の男があつた。彼はちよつと見たところ五十五六位に見えたけれども實際はそれよりも若いらしかつた。頭の禿けた鼻の大きい、緒ら顔の小男で、それがまた私のその時分の詩人らしい空想は、ツゲエネフやトルストイの小説の中に出て来る、露西亞の百姓を聯想させた。

「罪の血が冷たく流れてゐるのではあるまいか——」
といふ短かい辭句によつて一人の放浪者の過去の生活圖が感想される。

一夜の酒から今迄謎に見えた男の生活が急變し出すのも、さうした男として極めて自然で面白い。

私の孤獨な生活は、この闖入者のやうな僕が出来てから、幾分かその寂寞が慰められるやうになつた。私は勿論彼が何處から來たものであるかを知らず、また彼も何となくそれを問はれるのを怖れるやうに見えた。私は直ぐに表面純朴のやうに見える彼の皮膚の下を、罪の血が冷たく流れてゐるのではあるまいかと云ふ疑ひを起した。しかし私のその疑ひは時が経つに従つて忘れられてしまつた。

そのうち私は彼が意外に「藝人」であることを見出した。それは私が近所の煉瓦工場の主人の家へ招かれていつた時、彼は私を迎へに來て、そのまゝ引き留められて酒を飲まされてゐたが、そのうち酔つて唄ひ始めた。何と云ふ美音なのであらう。目を閉つて聽いてゐると、如何してもそこに頭の禿けた、鼻の大きい、赭ら顔の小男を想像することが出来なかつた。

「こいつは「藝人」の成れの果だな。」

私は心の中でさう思つた。

その晩から彼の態度は急に變つた。これまで眠つてゐた彼の「放蕩」の血は久しぶりで飲んだ酒の爲めに、再び目覺めたものであらう、彼は屢私から金を借りて、それを酒に代へるばかりでなく、時には家を明けることなどもあるやうになつた。さうして彼の私に對する態度は、まるで「幫間」のやうに卑しく、職業的の笑をさへ浮べ始めた。

彼が私の目の前から消えたのは、それから間もなくのことであつた。彼の行方はその後今になるまで分らないけれども、私はそれから數日経つてから彼を尋ねて私の家を訪れて來た一人の女のことを思ふと、思はず微笑するのを禁ずることが出来ない。彼の女はまだやつと十五位の少女で、私の所謂「苦痛の谷」に住んでゐる女であつた。

不幸な若い女達の身を賣る場所を「苦痛の谷」と稱んだのは、殊更に意味深く思はれる。

短かい一篇の中に、變轉多岐な運命の側面を窺はせる、好箇の敘事詩の一つである。

文章は、平明な味ひのうち、詩的暗示を多分に含んでゐる。

彼の失踪が近所に知れると、さまざまの噂が私の耳に入つた。しかしそれ等の噂はみんな取り留めのない噂ばかりで、彼の素性は遂に知るこゝとが出来なかつた。唯一人彼の「監獄の中の友達」と自稱する男があつて、さも何もかも知つてゐるやうにこんなことを云つた。
『なあにあいつはそんなに大した奴ぢやありませんよ。高が博奕で食ひ込んでゐるやがつたんだから。』

村の人達にも、また私にも、彼は直きに忘れられてしまつた。

「河霧」は相變らず水の上を暗く立ち罩めてゐるが、私はもう以前のやうに「傾聴」しなくなつた。

私はもうその頃では「河霧」よりも、「葦のそよぎ」に心が惹かれた。

語物葵日向

哀傷に傾き易い詩人の心を透して、人生の情的方面を巧みに描き出す點は、この作者の獨壇場である。

「向日葵」の花に對する聯想から、哀切な戀の物語を成すものが、この一篇である。

向日葵物語

向日葵では私はひとつの悲しい思ひ出を持つてゐる。一人の哀れな少女の死が、どの位私の心を動かしたかと云ふことは、その時分の私の日記を見ても直ぐに分る。私がこの「向日葵物語」で、私の悲しい思ひ出を書き残して置かうとするのも、この哀れな少女を傷むの情に堪へないからである。私の漂泊的 生活が始まつたのも、みんな彼の女の死から起つたことは、今更「過去」を振り返つて見るまでもない。さうして私が今でも時々襲はれる「憂鬱」が、それから數年の間續いた漂泊的 生活から得た悲しい紀念であるとする、一人の哀れな少女の死が、どれ程私

の生涯に影響してゐるかと思ふことが分るであらう。
 しかし私はこゝに始めて彼の女の物語を書くのではない。舊作「水莊記」の中で「向日葵の少女」と呼んでゐるのは、取りも直さずこの哀れな少女のことなのである。

その時分私は第一回の高等學校の入學試験に失敗して、更に第二回の試験を受ける勉強の爲めと稱して、田端の先きの大河に臨んだ父の別荘に住んでゐたが、多くの時間は空想に浪費してしまつて殆んど讀書を怠つてゐた。家は父が或る事業を企てた時の舊趾であつたから、「水莊」と呼ぶにはあまりに雅致を缺いてゐたし、それに永年人が住んでゐなかつたので、まるで廢屋のやうに荒れ果てゝゐた。

田端の停車場を出てから踏切を越して、二三町來ると右に折れる稍廣い田圃路がある。やつと車が通る位の路であるが、それを十町あまりも

「やつと車が通る位の路であるが——」
 といふ一寸見れば行易いやうな文字が、廣い田野を細く通じる畦道を偲ばせるに十分である。

日向葵物語

爽やかな曉に
 そことしもな
 い空想に耽る
 といふのは、

歩いて來ると、稍人家の立ち並んだ部落があつて、それを通り越すと渡船場に出る。この渡船場から半町程川下に私の家は立つてゐるのだが、それでも川に臨んだその西洋館は、この邊での大きな建築のひとつであつて、父のこゝで企てた事業が、最初は樟腦製造だつたものだから、村の人達は私の家を、稍反感を持つた侮蔑の意味から、唯「樟腦屋」と呼び慣らはしてゐた。

私とその「樟腦屋」の息子として、その荒廢した西洋館の二階の一間に住むやうになつたのは、私が十九の年の十月の末のことであつた。私は唯一人留守番の老夫婦を相手に、寂しい郊外生活を始めた。

朝、床の中で目を覺まして、窓から差し込む曉の光を見ながらいろいろの空想に耽るのが私の一日の中で最も楽しい時間である。そこには追憶もあれば希望もある、悔恨もあれば抱負もある。私の空想には限り

何といふ快さ
であらう。追
憶も希望も、
悔恨も抱負も
さうした朝に
は、まるで小
魚のやうに躍
るであらう。
この一節にも
氏の自からな
る詩人的表白
を認めること
が出来る。

蠢惑して止ま
ない河霧の姿
が、見透しが
つかないやう
に動いてゐ
る。

がないが、それもやがて扉を開けて入つて来る老僕の爲めに、無残にも
ことごとく破られてしまふ。私はそれから起さ上がつて、徐かに窓の傍
へ近寄つて、水の面に立ち罩めた灰色の「河霧」を眺めるのである。

あゝ、「河霧」。私は今この二字を書いてさへも、何となくこの時分のこ
とを思ひ出して、思はず胸が顫へ心が戦く。まるであの怖ろしい「運命」
のやうに、水の上を流れて居た「河霧」は、どんなに私を脅かしたであら
う。さうしてそれが到頭私の大事な「向日葵の少女」を奪つてからは、私
は到底その灰色の姿を見るに堪へなかつた。まるで呪ふやうに朝毎に「河
霧」は私の窓に迫つて来て、怖ろしい「運命」の言葉をささやく。しかし
後にはそれが怖ろしく思はれたけれども、こゝに移つて来た最初には、
その「河霧」が何だかなつかしく、私は起きてから先づ水の面を立ち罩め
てゐる、その灰色の姿に見入らないではゐられなかつた。

武蔵野に、い
かにも適はし
い光景であ
る。

私の一日の生活は、何と云ふ寂しい時ばかりが過ぎされたことであら
う。私はこゝに移つて来てからは、殆んど常に沈黙であつて、三日も四
日も口をきかないで過ごすことさへあつた。私の寂しい話相手として、
留守番の老夫婦がゐるけれども、これとても男は全くの聾であつたから
紙に文字を書いて示すより外、用を辨ずることも出来なかつた。

私は「空想」と「沈黙」とだけで一日を過ごした。時には起きると直ぐ河
岸に立つて、胸一杯「河霧」を吸ひ込むことがある。さうしてだんだん日
が登るに従つて「河霧」が晴れて向ふ岸の葦の洲が見え始める時分になつ
てから、池を廻つて歸つてゆくと、きつと裏の噴井戸の邊で、老僕に追
はれながら河の方へ急ぐ家鴨の群に出合ふのである。私は微笑を以てこ
の騒がしい一群を見送つてから、玄關の方へ廻つて石段を登り、そこか
ら遠く續いてゐる雑木林を見渡す。空車の響、風の音、如何してもこゝゝ

木の葉の浮いた水溜や、石橋の上に留つた赤蜻蛉の姿などを點出したゞけて、極めて廣い平野にのみある一

は「武藏野」の一部である。

「武藏野」と云ふ言葉は、その時分の私に取つて、かなり誘惑的な言葉であつた。私が唯一人ここに住むやうになつたのも、ひとつは「武藏野」と云ふ言葉に誘惑されて來たのであるが、それは私の「空想」を満足させるのに充分であつた。私は家の中の「沈黙」に倦きると林の中や河のほとりを歩き廻つた。木の葉の浮いてゐる水溜りや、流に懸けた石の橋も何時か私の目に馴染んで、私は屢々その水溜りに映る雲の影を見、その石の橋の上に留まつてゐる赤蜻蛉の姿に足を留めたことなどもあつた。「武藏野」の秋は、私を次第に「自然」に近付けていつて、私は漸く「人」を厭ひ始めた。

半年は夢の如くに過ぎてしまつた。それは事實「夢の如く」で、別に何の書くこともない。私は相變らず一日を「空想」と「沈黙」との爲めに過す

してゐて、入學試験のことなどは、殆んど忘れてゐたのである。

種の落ちついた静寂をしまゝく味はせる。

二

そのうちに夏が來て、向日葵の花の咲く時分となつた。さうしてこの「樟脳屋」の玄關にも、私が或る日の氣まぐれから、一面に植ゑた向日葵が、殆んど同時に黄金色の花を附け始めたのであつた。

或る日の朝、私が散歩から歸つて來て、門を入つて玄關の石段を登らうとすると、私ははからずもそこに佇んでゐる、一人の老いた郵便脚夫の姿を認めた。彼は私を知つてゐるらしく、丁寧にお辭儀をしてから、一封の手紙を私に渡した。さうして卑しけな笑をあとに残して、影のやうに門の外へ出て往つてしまつた。何と云ふ卑しけな笑であらう。しかし私はそれがこの手紙の差出人の女名前であることから來てゐると云ふ

未知の女から来た一封の手紙は、新しい出来事に、何の機端を與へるのであらう。

ことを知ると、私も思はず微笑せずにはゐられなかつたのである。私はさう気が付くと再び封筒に書いてある「松下久子」と云ふ名前を、見直さないではゐられなかつた。さうしてそれが私の未知の女であると云ふことを知ると、何となく私の胸は不安になつて来て封を切るのも躊躇はれた。

私はその手紙を持つたまま自分の部屋に入つて、極めて秘密なことも企まれてゐるやうな様子で四邊を見廻してから封を切つた。しかしそこには別に變つたことが書いてあるのでなく、稍媚を含んだやうな手蹟で、

「突然お驚かしまゐらせ候こと何とも申譯これなく候。先月の「星屑」にお出しになりしお歌うれしく拜見いたし候。兩三日うちには是非お訪ねいたしたく、不仕付なる女よとお蔑みなきやう願ひあけ候。いづれお目も

じの上。かしこ』

と書いてあつただけであつた。私は何だか裏切られたやうな心持で、じつとこの手紙に見入つてゐたが、それでもこの文字から匂つて來るなまめいた薫りには、心がときめかすにはゐられなかつた。

私が「星屑」(それは當時の文壇ではかなり權威のある詩歌中心の雑誌であつた。)に出した歌と云ふのは、私の「空想」の中に住んでゐる戀人に贈る歌であつた。それはかなり感傷的なものであつたから、多少讀者の心を惹いたと見えて、私は彼の女の外にも、二三通未知の友からの手紙を受取つたのであつた。しかしそれはすべて私と同じ位の青年からで、女からの手紙は、彼の女のものが始めてなのであつた。

私はその朝からいくらか「憂鬱」を忘れることが出來た。半年の間秋から冬を通して私を苦しめた「憂鬱」は、春になると更に烈しく私の心を惱

若い移り易い
そして自由な
心が素直に描
かれてゐる。
未知の女から
の手紙によつ

て急に新しい世界が開かれて来るやうな心持になるのも細かに捉へられてゐる。

「向日葵の花に輝く日光は……」の紋景句は、簡素でありながら、かなり繊細な印象を與へる。

まして、今初夏の向日葵の花が咲く頃となつても、猶私の胸はあの窓の外に輝いてゐるやうな日光を受け入れることが出来なかつた。それが彼女の女からの手紙を受取ると同時に、急に新しい世界が私の前に開かれて来るやうな心持がして、彼の女の訪れて来る日が切に待たれた。

向日葵の花に輝く日光は、日毎に烈しくなつていつた。じつとその金色の花を凝視めてゐると、目が眩むやうな心持がして、とても長く見入つてゐることは出来なかつた。

石段を走り過ぎる蜥蜴の背にも、向日葵の莖を匍ひ上る蟻の上にも、火のやうな太陽の光が注がれてゐた。

彼の女が手紙に書いた二三日の時は、何時の間にか過ぎ去つてしまつた。さうして彼の女が私のこの荒れ果てた「水莊」を訪れたのは、それから十日餘りも経つてから後のことであつた。

「憂鬱」そのもの、如くに寂しい日の午後——といふ字句には、濃かな氣分が封じ込まれてゐる。

私が或る日もう待ちくたびれてしまつて、せめて心を紛らす爲めに散歩でもしようと思つて、私の部屋から出やうとすると、私ははからずも玄關の鐘が誰にか鳴らされてゐるのを聞いた。それは私がここに移つて來ると間もなく、私の骨董癖から買つて來た鐘を、訪れて來る人達の爲めに、玄關に吊るして置いたのであつた。しかし私は殆んど「隠遁」してゐるやうな生活をしてゐるのであるから、あまりここに訪れて來る人もなくつて、これまでにこの鐘の響を聞いたのは、たつた一度あつただけなのである。

それは去年の冬の始めのことであつた。雲まじりの雨が降つて、「憂鬱」そのものの如くに寂しい日の午後、私は玄關の方から響いて來る鐘の音を聞いた。私は始めてこの鐘の音を聞いたのであるから、誰が鳴らしてゐるだらうと云ふ好奇心から、急いで二階の階子段を降りて、自分で玄

全體の筋から見れば、ほんの一二行の點景的な描述に過ぎないが、かうした箇所にも作者の詩趣を表はすに秀でた注意や手法が、十分に見えるではないか。

關へ出ていつて見た。

何と云ふ馬鹿けた訪問者なのであらう。それはこの村を犬のやうに彷徨い歩いてゐる、「勘太」と云ふ名の一人の白痴で、彼は私の顔を見ると同時に聲を上げて笑つた。

それ以來鐘を鳴らすものもなかつたのであるが、今その響を聴いて見ると、私は或はまたあの白痴の悪戯ではないかと思ひながらも、急いで玄關の方へ走らずにはゐられなかつた。さうして私はこの時始めて、私の「向日葵の少女」に逢つたのであつた。

私はその日彼の女と何を話したのであらう。何だか今思ひ返へすと夢のやうで、はつきり思ひ出すことが出来ないが、彼の女の身の上について、いろいろのことを知つたのはその日である。それから今猶覺えてゐるのは、彼の女が私の部屋に入つて來てから、窓から外の河の方を眺め

て、

『まあ、好い景色ですこと。』

と云つた、彼の女の最初の言葉である。それともうひとつは、何か自分の話が終ると辯解するやうに、

『ずるぶん私は變つてゐるでせう。』

と繰り返して云つた言葉である。さうして私は彼の女の美しい容貌に魅せられるよりも、より多く彼の女の不思議な閱歷に心が惹かれた。

彼の女の話したところに據ると、彼の女は神戸の或る貿易商の娘であつた。それが父の事業の失敗から印度の或る商人の家に貰はれていつて、そこで彼の女は子供の時分を過ごした。彼の女のその時分の話をする時は、夢見るやうな眼差で、遠くの方を見入つてゐるやうな様子であつたが、やがて私は彼の女の目がだんだん潤んで來るのを見た。遠く海を隔

一日ふと訪れた少女は、幼い時に異國へ貰はれて行つたのだといふ。もうそれだけで數奇な極めた身の上であるのに、

運命は更に訝
かしい怖ろし
い何ものかを
この少女の身
の上に加へよ
うとするので
あらう。

てた異郷に来て、彼の女は子供心にもどんなに悲しく思つたであらう。
椰子の葉蔭にも思ふ時、きつと彼の女の目には涙があつたに違ひない。
しかし彼の女を貰つていつた人は、印度でも名高い富豪であつたから、
彼の女にはあらゆる贅澤をさせて、まるでほんとの子であるやうに可愛
がつた。それ程までにしても馴染まない彼の女を見ると到頭思ひあきら
めたものか、彼の女の十二になつた時、丁度彼の家に淹留してゐた日本
の畫家に托して彼の女を再びその父の家に送り還して來た。

彼の女の父もその時分はもう家運を挽回してゐたので、彼の女の云ふ
がままに學校に入れて、今ではその印度から彼の女を連れて還つた畫家
のところ、油畫を習つてゐるのである。

さうして彼の女は話し終つてから急に氣が付いたやうに、

『あなたは向日葵の花がお好きなんですか。』

と私に訊いた。

『ええ、大好きなんです。』

と私が答へると彼の女は頷いて、

『私も大好きですわ、印度なんて熱い國で育つたせい、ああ云つた花
が好きで堪りません。』

さう云つてから彼の女はまた夢見るやうな眼差で、遠くの方を見入つ
てゐるやうな様子であつた。

三

彼の女はそれから毎日のやうに、私のところへ訪ねて來ては、幾枚も
幾枚も向日葵の繪を描いた。

或る時などはこんなことがあつた。この日は朝から荒模様で、水に映

異常な境遇に
置かれた、夢
見がちな少女
を現はすに適
はしい會話で
ある。

向日葵の花と
黒い猫——何
となく暗示的
な怪しげな畫
題ではない
か。

つてゐる空の色にも何となく不安を暗示するやうな光があつた。彼の女はその日朝から私の家へ来る約束だつたから、私はいつもより早く目を覺まして、彼の女の手によつて鳴らされる鐘の響を待つた。壁に懸けてある彼の女の畫は、もう五六枚になつたけれども、それはことごとく向日葵を描いたものばかりであつた。向日葵の花を唯一輪大きく描いたものもあれば、一面に數多くの向日葵の花を描いたものもある。さうして向日葵の花の外に何か配合されてあるものと云へば、その中の向日葵の畑を畫いた一枚に、一匹の黒猫があるばかりであつた。向日葵の花と黒い猫、それは私の目に何ものかを暗示するものの如く、微かな恐怖をさへ強いるのである。

彼の女の繪の中にある黒猫は、或る素性の分らない闖入者が、何處からか連れて來たのであつた。彼はまるで自分の子供か何かのやうに、こ

の黒猫を愛してゐた。その後間もなく、彼は影のやうにこの家の中から消えてしまつたけれども、黒猫は猶私のところに残つてゐて、私の机の上などにも、屢その怪しげな姿を現はすのであつた。さうしてこの黒猫は、彼の女には最初からよく馴染んで、よくその膝の上に載つてゐる姿を見た。

私が彼の女の描いた向日葵と黒猫の繪を眺めながら、こんなことを考へてゐると、私は突然何者が背後から忍び寄り寄る氣勢がして、急に兩方の目が塞がれたかと思ふと、なまめかしい黒髪の匂ひが襲ふやうに私の體を取り捲くのを感じた。さうして耐へ兼ねたやうな笑ひ聲に依つて、それが彼の女の悪戯であると云ふことが直ぐに分つた。

『さあ、もう堪忍して上げませうね。』

彼の女はさう云ひながら、私の目を塞いでゐた、その柔かい手を取り

官能的描寫の
好い一例であ
る。

狂亂を好む女の心持が、あからさまに動いて来る。戸外の暴風雨につれて、暗くされた室内の窓際に立つ女の傍が、黒く映するやうである。

暴れ狂ふ風雨に唆かれて、多恨な女の血が狂ひ立つのは、何といふ痛ましきであらう。感傷的味ひの勝つた文字である。

去つた。さうして微笑しながら私の前の椅子に腰を懸けて云つた。

『今日は何だか暴風雨になりさうだわね。私こんな天気が大好きなんですよ。』

まるで彼の女を喜ばせる爲めかのやうに、直ぐに烈しい暴風雨が来た。狂人染みた彼の女の心は、まるで子供のやうに暴風雨を喜んで、窓から外の凄まじい景色を眺めながら、われを忘れて立ち盡くしてゐた。

人の世の暴風雨には、彼の女は子供の時分から慣らされてゐた。残酷な人の世の暴風雨は、早くもまだ物心の附かない彼の女を、遠く印度の果まで吹き送つてしまつた。彼の女は暴風雨を好むと口では云つてゐるけれども、それは唯彼の女が残酷な人の世を詛ふ言葉に過ぎない。彼の女のやうな繊弱い女が、如何して人の世の暴風雨に堪へることが出来る。数奇なる彼の女の「運命」は、既に印度に連れて往かれた時からして、

暗い影をこの世の路に投げてゐるのであつた。

暴風雨と女の心とが、微妙に交錯して出てゐるばかりでなく、女の心理の推移がいかにも自然に偲ばれる。

私はこんなことを考へながら、不圖目を上げて彼の女の方を見ると、私ははからずも彼の女の唇を洩れる歎歎の聲を聴き、彼の女の頬に流れる涙の痕を見た。さうして私が驚いて立ち上がらうとする時、私は私の膝の上に、突然倒れるやうに泣き崩れた、彼の女の體の重みを感じた。

それから一時間の後には、もう暴風雨は過ぎてしまつてゐた。私は彼の女を促がして、一所に玄關の石段を降りた。さうして無残にも暴風雨の爲めに吹き倒された、向日葵の畑を見て廻つた。烈しく輝いた日光の下に、折れた莖や破れた葉が、傷ましい姿を曝してゐて、彼の女が繪に描いたやうな美しい向日葵の花は、もうそこには跡方もなかつた。

『ずるぶんひどくなつてしまひましたね。』

『ええ、ほんとに憎らしい暴風雨ですこと。』

「花瓣には黒い蟻が汚染のやうに、いつまでもいつまでも動かすにゐた」といふ一節は的確な印象の極めて鮮明な文字である。暴風後の庭の一隅がはつきり浮び出る思ひがする。

『しかしさつきあなたは大好きだつて云つたぢやありませんか。』
『さつきはさつき今は今ですわ。私の好きな向日葵の花を、こんな滅茶滅茶にしてしまふんですもの。いくら好きな暴風雨だつて、憎らしくなるぢやありませんか。』

彼の女はさう云ひながら傷ましげに、直ぐ目の前に吹き倒されてゐる向日葵の花を見た。花瓣には黒い蟻が汚染のやうに、いつまでもいつまでも動かすにゐた。

しばらくじつとそれを眺めてゐた彼の女は、急に思ひ付いたやうに石段を駆け上つていつて、カンヴァスと繪の具箱とを持つて来たかと思ふと、そこに三脚を据ゑて、その向日葵の花を寫生し始めた。さうして私はそれに「暴風雨のあと」と云ふ書題を與へた。

四

奇異な、といふよりは人意を無視した行為が、女の新しい運命を造らうとしてゐる。

彼の女もやはり向日葵と同じやうな「運命」を持つてゐなければならなかつた。人の世の暴風雨は再び彼の女を襲つて来たのである。

それから一月ばかり経つてからの或る日の午後のことであつた。彼の女の訪問が十日ばかり絶えてゐたので、如何したのかと思つてゐるところへ、突然彼の女が訪れて来た。しかし私は彼の女の面に漂つてゐる、不安の色を直ぐに認めた。その不安の色の中には、避け難き「運命」に対する恐怖が最も強く動いてゐた。さうしてその黒い瞳を透して見える彼の女の小さな生命の火は、戦ぐが如く運命の風の前に顛へてゐた。

彼の女がその日私に打ち明けたやうなことが、現在この世にあり得べきことであらうか。しかしそれは彼の女の口から、まさしく私の聴いた

ことであるから、この世にあつた事實でなければならぬ。

『ほんとに世の中つてもものは不思議なものですわね。』

彼の女はかう云つてから、近頃彼の女の身の上に起りつつある、不思議な「運命」を物語つた。

それはその日から十日ばかり前のことである。彼の女は突然一封の手紙を持つた、一人の黒奴の訪問を受けた。さうしてその黒奴は、彼女が何處から来たかと云ふことを訊ねる前に、影のやうにその姿を隠してしまつたのであつた。彼の女はその手に謎のやうに残された一封の手紙を見て、直ぐにそれが何かの凶兆であるといふことを豫覺せずにはゐられなかつた。

彼の女が怖々封を切つて中を讀むと、そこには英語で次のやうな意味の言葉が認めてあつた。

『おん身を見むが爲めに、再び日本に來り候。一度は父と呼びたるわれを忘れずば、明日午後二時まで、横濱の×××ホテルまでお出でを待上候。』

その手紙には、何だか強い魅力があつた。彼の女はその翌日その手紙の云ふがままに横濱に往つて彼の女が子供の時分養はれてゐた印度の富豪に會つたのである。

彼の女がその時、「一度は父と呼びたる人」の口から聞いたことは、どんなに彼の女を驚かしたであらう。彼の女の籍はもう既に印度に移されてゐて、しかもこの富豪の息子とは、疾ふから婚約の間となつてゐるのであつた。彼が再び日本に來たのも、實は彼の女を迎へに來たのであるといふことが、この時始めて彼の女に打ち明けられた。

何と云ふ数奇な「運命」であらう。神戸にゐる父に訊けば、それは事實

傳奇的な色彩
が強くなつて
来る。

であるから印度に往くが好いと云ふ返事である。唯「黄金」の價値ばかりを知つてゐる父は、印度の富豪であると云ふことが、彼の女を幸福にすると思つてゐるのであつた。かくて彼の女は幾日か懊惱した揚句、遂に私に打ち明けることに心を極めて、この「水莊」を訪れて來た。

『さう云ふ譯で、私はまた印度に往かなければならないかも知れないんですの。』

彼の女はさう云つて涙に潤んだ目を上げて訴へるやうに私を見た。私達の間には長い間悲しげな沈黙が續いた。私はそこに怖ろしい「運命」の手の冷たさを感じて、もうそれが如何することも出来ないことのやうに思はれるのであつた。

窓から外に眺めると、向日葵の花も醜く凋んで、彼の女の「運命」を暗示するやうに見えた。あの向日葵が枯れる時分には、彼の女はもう遠い

醜く凋んでゆく向日葵によつて、痛まし

い少女の運命を象徴した點が興味深い。

遠い印度に往つてしまふのであらう、さうして再び彼の女の美しい黒瞳を見る事が出来ないのであらう。私はそれを思ふと、また新しい悲しみの爲めに、胸が塞がるやうな切ない心持にならないではゐられなかつた。

不圖見るとあの黒猫か忍びやかに向日葵の畑の中を歩いてゆく、まるで彼の女を呪つてゐるかのやうに。

私が彼の女の死を知つたのは、それから一月程経つてからのことであつた。それは彼の女が上海から出した手紙（それは彼の女の遺書であつた）に據つて、その死を知ることが出来たのである。それは極めて長い手紙であるから、今こゝにはその終りの方一節だけを引かう。

『私の船はたんだん熱帯に近付いてゆきます。空の色も海の色も次第に變つてまゐりました。さうして私はあなたのところから、もう幾千里を

悲しみの長い手紙である。

夜の船中の異様な寂寞の中で、唯一人目ざめながら、遺書を書いてゐる少女の姿が慘として浮ぶ。

隔ててしまつたのです。あの向日葵は如何なつたでせう。私の大好きなあの向日葵の花を思ふと、私は樂しかつた日の夢を思つて、胸がおのつから顫へるやうな心持がします。

今はもう夜の二時に近いでせう。さつき一時を打つ時計の響を聴きましたが、それからはもう大分経ちました。私は唯一人船の圖書室の机に凭つて、この手紙を書いてゐます。静かな夜です。唯微かに機關の響が傳はつて来るばかりで、聲音ひとつ聴こえません。私はこの異様な寂寞の中で、唯一人あなたのことを考へ、また自分の「運命」と云ふことを考へて、今やつと或る決心に辿り着くことが出来ました。

向日葵の花が凋むやうに、私の生命は滅びなければなりません。私の携へて來た鞆の中には、私が日本で密かに買ひ求めて來た拳銃があります。冷たい引金に私の指が懸かる時を想像して下さい。銃口から白い煙が

湧いて、炎となつた鉛の弾の飛び出す時を想像して下さい。さうしてその時私の體は如何なるのでせう。

ホフマンスタアルの「チチアンの死」は、沈痛な死を取り扱つた現代戯曲の一傑作である。

不圖書棚の本の DEATH と云ふ文字が目に入りましたから、手を延ばして引き出して見ると、それはホフマンスタアルの「チチアンの死」と云ふ戯曲でした。私はこの手紙を書き終つてからこの戯曲を読んで、さてそれから靜かに私の最後の仕事に取り懸かりませう。

私は今極めて靜かに自分の生命の路を歩いてゐます。私が生れてから今までに一度も味はつたことのないやうなこの静けさ、氣味の悪いやうなこの静けさの中にあつて、じつとこれから自分のゆく先を凝視めてゐると、思はず冷やかな微笑が頬にのほつて來ます。

いよいよ私の最後の時が來たと見えて、インクも盡きてしまひました。』

怪しい神経の
顫動と、不思
議な幻覺——
そこに何か超
自然の現象が
認められるや
うに思はれ
る。

形容がいかにも
も秋らしい。

彼の女の手紙は、これで終つてゐるのである。
私がこの手紙を受け取つたのは、もう夜になつてからで、机の上には
蠟燭の火が黄いろく瞬いてゐた。涙に潤んだ目でじつとその蠟燭の火を
凝視してゐると、何時の間にかそれが向日葵の花となつて、その蔭から
彼の女の白い顔が差し覗いてゐるやうにも思はれるのであつた。

五

秋が来て再び「河霧」の立ち始める時分となつた。林には日光が火の如
く輝き、河には蘆の花が銀のやうに咲いた。窓から外を眺めてゐると、
「河霧」を透して見える渡船の上にも、そこに小さな「運命」があつた。時
雨の音も空車の響も、私にはことごとく「自然」の聲と聽かれ、私は再び
「自然」に親しむやうになつた。

しかし私はどんな時でも、あの向日葵の花を忘れることが出来ない。
さうしてあの哀れな「向日葵の少女」を忘れることが出来ない。私の部屋
の壁には、彼女の女の描いた向日葵の畫が、幾枚も幾枚も懸かつてゐる。
畫はかうやつてこゝに残つてゐるけれども、それを描いた彼女の女はもう
この世にはゐないのである。私はいつも壁に懸けてあるこれ等の向日葵
の畫を眺めて、ながく歸らぬ人を思ふ。

私は幾度繰り返して、あの悲しい遺書を讀んだであらう。彼の女が死
ぬ前に讀んだと云ふ「チチアンの死」は私の机の上にも置かれてゐる。

「河霧」は日毎に濃くなつていつた。さうして私の「憂鬱」も夜毎に深く
なつていつた。

あの黒猫はやはりこの家の中にあるのだけれども、もう以前のやうに
私の目の前に現はれなくなつた。しかし時々私の部屋の中に入つて來

不自然のやう
で、而かも確
實にあり得る
光景の一つで
ある。孰れに
しても、この
一篇は、我々

の知り得る人意と、我々の見定め難い運命とを、巧みに綯ぜた哀話である。

悲しい葦のそよぎから、おのづと神話めいた想像を惹起されるといふあたりの情趣の、いかに豊かなるかを見よ。そこに作者は「人間の秘密」「人間の

て、机の上に垂れた蠟涙を、貪るやうに舐めてゐることがある。さうしてその後ではきつと彼の女の描いた向日葵の畫を、その青く輝いた瞳で凝視してゐる。

葦のそよぎ

今から十五六年ばかり前、私が郊外の河岸の家に住んでゐる時分、堪へがたきまでに私の心を動かしたものは、あの悲しい「葦のそよぎ」であつた。

往昔から今までこの「葦のそよぎ」を聴いて、圖らずも「自然」の秘密を耳にしたやうに、驚きの目を見はらなかつたものはなかつたであらう。一體、あの悲しい「葦のそよぎ」は、何を私に叫かうとしてゐたのであら

の靈魂」を見出したのである。

葦のそよぎ

河霧が人生の哀音を囁いたやうに、葦のそよぎは、今何を詩人の胸に眩くのであらう。

うか。私は屢、不圖した事からその身を葦に變へられて、一人歎き悲しんでゐる王女があつたのではあるまいかなどと神話めいた事を想像しながら、河岸に亘んでこの悲しい「葦のそよぎ」を聴いた。そして、私は更に又、その悲しい「葦のそよぎ」の中から、日頃から私達の知りたがつてゐる「自然」の秘密を聴き出さうとしたのであつた。

しかし、如何してあの「自然」の秘密が、私のやうなものに窺ひ知る事が出来やう。私はかへつて「葦のそよぎ」の中から、悲しい吾々「人間の秘密」を教へられた。

今ここに書く二三の小話は、すべて「葦のそよぎ」が私に叫び出した物語である。私はそこに露西亞の百姓が持つてゐるやうな、無智で粗暴な、しかし何處かに可哀らしいところのある、哀れな靈魂を見出さなければならなかつた。

私の家の河向ひの村に、或る怖ろしい殺人事件が起つたのは、私がここに移つて来ると間もなくの事であつた。

それは或る夜、河向ひの村で最も富んだ百姓の家に強盗が入つて、かなり多額な金を掠奪した上、主人夫婦を惨殺したと云ふ血腥い出来事で、それから一月位の間と云ふものは、この近傍の村々では、殆んどこの噂で持ち切つてゐた。そして、それからそれへ語られてゐる間に、さまざまな想像が附け加へられて、噂はだんだん擴まつて往くばかりであつた。

そのうち私はその殺された百姓の息子が、犯人の嫌疑で拘引されたと云ふ噂を聞いた。その息子と云ふ男は、百姓と云ふよりは博徒の方に近いやうな無頼漢で、私は屢河岸の渡頭などで、賭場歸りらしい彼の姿

を見た事がある。見るから獐猛な貌付をした若者で、今怖ろしい親殺しの嫌疑を受けたと云ふ事も、日頃の彼の悪行から推測して、當然さうある可き事のやうに誰しも思つた。

しかし、この際に彼に同情してゐるものが、かなり大勢その村にあつた。それはその村に住んでゐる若者達で、彼等は屢この無頼漢から、金と力との庇護を受けて、隣村との間に何か争鬪の起つた時などに、なくてはならない人と云へば、彼を措いて他にはなかつた。事實、彼は多くの博徒が持つてゐるやうな、愚かな、稍誇張された俠氣から、常に何か事件のある時には、先に立つて働いてゐた。

無智なこの村の若者達は、常時の棍徒の彼を忘れて、かう云ふ時の彼を忘れなかつた。彼が拘引されて以來、大きな賭場の開かれぬのも、彼等には寂しく感じられた。彼等の胸には、この村の勇士を失つたと云

惨劇を機會として、日頃小さい村のかくされてゐた動靜の一部が、忌はしく曝されるといふこととは、深い興味を惹かすにはゐない。

博悪な「親殺し」の罪人が、一種の渴仰を唆る偶像に見

えて来るといふのは、皮肉なやうで而かも痛ましい人間心理である。人間の秘められた醜い心理が捉えられてゐる。

ふ寂しさが、だんだん深くなつて往くとともに、一種の渴仰に似た念が湧き始めた。そして、終ひにはもうその怖ろしい「親殺し」さへ、彼の英雄的行爲の最も大きなものとして、多くの人々に依つて讃へられた。

かう云ふ有様であつたから、證人に呼び出された村の若者達は、誰一人として彼に不利な證言をするものがなかつた。或る者はその前夜、彼がその父母と烈しい争闘をした後で、恰もその死を豫告するやうな罵詈雑言を残して、その家を立ち去つたのを知つてゐたが、それに就ては口を噤んで、遂に一言も洩らさなかつた。或る者は又その曉方、雨に濡れて堤の上を走つて往く、覆面の彼の姿を認めてゐたが、やはり堅く沈黙を守つて、遂に何事も語らなかつた。かくて多くの若者達は、交る交る證人として呼び出されたけれども、誰の言葉からも確かな證據を見出す事が出来なかつて、事件は次第に迷宮に入つて往くばかりであつた。

怖しい「親殺し」を出した

村の長閑かな春！ 惨事の演ぜられた家の白壁、荒れた畑、雲雀の囀り、それらの間に自然と人事の訝しい囁が籠められてゐる。

冬がだんだん深くなつて往くとともに、春が早くも近付いて来た。そして、彼等が「牢獄の英雄」は、遂に自白を餘儀なくされた。その結果、村の若者達の大部分は、偽證罪と云ふ名の下に拘引されて、同じ牢獄に囚はれの身となつてしまつた。

春は来たけれども河向ひの村では、誰も耕耘の事に従ふものがなかつた。荒れて雑草の茂つた畑には雲雀が囀り、私の部屋の河に向つた窓から見ると、「親殺し」のあつた家の白壁が、長閑かに私の目に映つた。しかし、彼等の多くはまだ、何時又その村に歸つて來られるか分らなかつた。

あの不思議な「闖入者」の事は、既に「河霧」の中で談したけれども、まだあれでは彼の全體に盡してゐない。

春を迎える情
緒がよく表白
されてゐる。

河沿ひの春を
漲した風物が
簡淨な文字で
描かれてゐ
る。郊外の静
けさを破る音
響なども注意
深くとりいれ
られてゐる。

それは彼の失踪する十日ばかり前の事であつた。長い冬が漸く去つて、春がこの「武藏野」の一部にも訪れて来ると、長く續いた雑木林は、一齊に青い芽を吹き始めて、郊外の瞰望は瞬く間に變つて往つた。私は長い冬の蟄居に潜んでゐたので、この頃では日毎に散歩をして時を過した。野の徑にも、林の中にも、或ひは又河の岸にも、そこに懐しい「自然」の聲があつて、私の心は自ら躍り、私の胸は自ら顫へた。

或る日の午後、私は例の如く唯一人散歩に出て、河岸に従いて歩いて往つた。空は曇つてはゐるたけれども、時々薄日が雲を洩れて、河の面は明るかつた。徐かに風に順つて溯つてゆく船の帆は、折々日光を受けて閃き、何を漁つてゐるのか、葦の洲に群がった鳥の中には、それに驚いて飛び立つものなどもあつた。

そこに煉瓦工場があつて、一人の眇目の職工が竈の側に立つて、ほん

やり河の方を眺めてゐるたが、やがて何か呟きながら往つてしまつた。遠くの方から聴こえて来る汽笛の音、汽車の鐵橋を渡る響、それから時々河を溯つて来る、けたたましい石油發動機船がある外には、何のものの音をも耳にする事が出来ない。何と云ふ静かな午後の散歩であらう。

しかし、私のこの静けさも、さう長くは續かなかつた。私はそれからあまり遠く歩かないうちに、圖らずも私の心を亂す或るものに出會つた。私は不圖前の方からこつちに近附いて来る人影を認めて、思はずそこに立ち留まつた。そして、

『おや、あいつ何處へ往つた歸りなんだらう。』

と、呟かすにはゐられなかつた。

それはまさしくあの不思議な「闖入者」、即ち今の私の僕であつた。彼も私の姿を認めると、稍狼狽した様子であつたが、それでも私の傍に来

た時には、もう狡獪な微笑をさへその頬の上に浮べてゐた。
 私はかなり長い間そこにゐんで彼と話した。私は彼に向つて疑ふやうな態度を示さなかつたので、彼も安心したらしく、いささか媚びるやうな表情をしながら、彼が先刻この河下で見たと云ふ、或る情死者の死態などを私に語つた。その言葉を聴いてゐると、何となく人を魅するやうな洗練が、その調子の上にあつた。

「こいつは慥かに旅廻りの落語家だ。」

私は心の中ですつかりさう極めてしまつて、滑らかに彼の唇から這り出す言葉に耳を傾けながら、直ぐ脚下を悠やかに流れてゐる、濁つた水を眺めてゐた。

しかし、不圖私が目を上げた時、私はそこに何を見たであらう。彼の懐の膨らんでゐるのに氣が付いて、何氣なくその邊を凝視すると、私

不用意の間に
 無智をさらけ
 出した光景が
 ある女との情
 事を裏付けて
 おもしろく描
 き出されてゐ
 る。

心理の推移が
 細やかに窺は
 れる。

は圖らずもそこに、赤い鼻緒の草履を見出したのであつた。私はそれを見出すと同時に、彼の所へ近頃屢來る、拙い女文字の手紙のあるのを思ひ出して、思はず微笑ますにはゐられなかつた。

見たところは五十五六に思はれる、頭の禿けた鼻の大きい、緒ら顔の小男の懐から、赤い鼻緒の女の草履が挟み出してゐる形は、滑稽と云ふよりは、寧ろ悲惨に思はれたのであつた。その赤い鼻緒の女の草履は、彼が戀人に對する心盡くしの贈り物に違ひなかつた。

私はそれから彼と別れて、再び散歩を續けたけれども、以前のやうに靜かに「自然」に親しむ事が出来なくなつた。ややともすれば心を亂す何ものかがあつて、私の胸は惱ましく壓された。

空はすつかり霽れてしまつて、日光は烈しく河の面を照らした。しかし、私の心は更に悲しく曇つて往つて、再び散歩を續けるのに堪へな

敏感な詩人の心をもつて、幽妙な自然と多端な人生との冥合する境を描き出した作品である。

つた。

春から夏、夏から秋へ懸けて、私の散歩は息みなく続いた。そして、私は屢河の岸邊に立つて、「葦のそよぎ」の叫ぶのを聴いた。蕭やかに遠ざかつて往く「時雨」よりも、音もなく流れて往く「河霧」よりも、靜かに墜ちる「落葉」よりも、私にはあの悲しい「葦のそよぎ」が懐しかつた。その「葦のそよぎ」が私に叫びた物語は、まだ数々あつたけれども、それは今ここに話す機会を持たない。僂儂の子の怖ろしき戀、洪水の夜の白痴の死、その外猶多くの物語を、私は「葦のそよぎ」の中から聴いたといふ事だけを云つて置かう。

そこには悲しい「人間」の秘密があつた。そして、私はあの哀れな百姓達の靈魂の外に、己れの靈魂も又、その中に見出さなければならなかつ

た。

第二鎌倉夫人

獨歩の「鎌倉夫人」を讀んで、不圖思ひ出した話がある。

それは今から十年ばかり前、私が鎌倉に轉地療養をしてゐた時分のことであつた。私はその一年ばかり前から、新派の歌を作り始めて、新詩社の社友にもなつてゐたので、偶には小集のある時に、わざわざ鎌倉から出て来てその席に加はることもあつた。私が「鎌倉の友達」K君と知り合ひになつたのも、不圖この小集で落ち合つて、お互ひに鎌倉に家があるところから、歸路を同じうして以來のことなのである。

私の「鎌倉の友達」はその時分もうかなり有名な小説家で、小集の席上

獨歩の「鎌倉夫人」は、曾て相愛した果に女の方から裏切られた男がとある日、過ぎ去つた日に自分が享けたと同じやうな媚びを、傍のある一人の男に與へながら歩いてゐるその女を見

た——さういふ境地に置かれた男の苦しい心理を描いた作品である。一つの歌で、間接に作中の男を描いたのもおもしろい。長々しい描寫よりも、どんなにか有効であらう。

などではよく「藝術」の爲めの饒舌を振つて、いつも最後にはその崇拜してゐるゾラを讃へた。彼は疎髯短軀のあまり風采の揚がらない男で、誰かがその時分戯れに作つた、「わが嫌ふひとは背廣の服を着て海釣こちを見る姿かな」と云ふ一首の歌は、彼のすべてを云ひ現はし得て充分であつた。しかし彼はそんなことを云はれながらも多くの人から愛される素質を持つてゐた。さうして私もまた彼を愛する一人であつた。鎌倉の私の孤獨な生活は、この愛すべき一人の友達に依つて、どんなに多く慰められたであらう。

彼も私もともに「孤獨」であること云ふことが、その交情に一種の同情に似た濃度を加へて、私達は日毎に往來するやうになつた。私は坂之下の海岸に一軒の別荘を借りて住み、彼は停車場の前の時計屋の二階の、三間程の西洋間を借りて住んでゐたから、その間にかのりの道程があつた

けれども、私もよく彼を訪問し、彼もまた海岸の散歩の序でなどには、よく私の家へ寄つた。

その時分私は、何故か「鎌倉」と云ふ文字に魅せられてゐて、單に避暑地と云ふばかりでなく、靈魂の避難所として屢こゝを選んだけれども、種々のことに妨げられて、これまで遂に果されなかつた。それが偶然にも醫師の勧告に依つてこゝに轉地療養をすることになつたのであるから、私は唯「鎌倉」に住んでゐると云ふことに満足して、「孤獨」を歎ずると云ふことなどは、寧ろ贅澤と云はなければならなかつた。

しかし私は目の前に友の孤獨な生活を見せられると自然己も「孤獨」を感じずにはゐられなかつた。さうして、私達の親しい交際は、何時か「戀」の話をするやうになつて、終ひには二人砂山の上に寝そべりながら、一日この避暑地に住んでゐる女達の、月旦をして暮らすことなどもあつ

孤獨が二人を結びつけてゆくのは、興味が深い。

青年時代に、よくある好尚の一つ。

た。

『この鎌倉でも僕を戀してゐる女が三人ゐるんだが、君には誰だか分かるかい。』

彼は眞面目とも笑談と附かない調子でこんなことを云つたが、實際それは己とその「孤獨」を慰める言葉に過ぎないらしかつた。さう云つて私を嘲けるやうな傲りの色を顔に浮べてゐるが、私は彼の頬の上に漂つてゐる、「寂しき陰翳」を見遁す譯にはいかなかつた。

私達はそれから屢この砂山を訪れ、獨歩の「運命論者」が好んで來たのもこゝだらうと云ふので「運命ヶ丘」などと云ふ名まで附けた。

しかし私達の「孤獨」は、さう長くは續かなかつた。「彼の女」が私達の目の前に現はれて來たのは、それから間もなくのことであつた。

魅され易い心がよく出てゐる。

「彼の女」はNと云ふ名の若い女で、その時分K君の云つてゐた言葉を借りて云へば「頗る妖艶な、人を魅する力に富んだ女」であつた。彼の女」は或る大きな事業家の娘で、虎の門の女學館を卒業してからと云ふものは、すつと扇ヶ谷にあるその父の別荘に住んでゐるのであつた。

彼の女は全くK君の言葉の如く、極めて美しい容貌を持つてゐる上に、人を魅する力に富んだ女であつたから、私達の月旦には、常にその名が上つてゐた。さうして二人とも彼の女に對して、淡い「戀」を感じてゐるのも事實であつた。私達は互ひに、彼の女を情人とすることが出來たならば、どんなに幸福であらうなどと語り合つた。

しかし、私達は唯、海岸を散歩する時などに、偶然出會ふことがあるばかりで、遂に一度も言葉を交すやうな機會もなく、徒らに「時」の過ぎて往くのを歎かなければならなかつたが、そのうちに不圖したことから

私達の待ち設けてゐた「幸福」は、向ふからこつちへ近付いて来た。

それは六月の終りの或る日の午後のことであつた。私達は二人の友である一人の畫家が、東京から遊びに来たのを停車場に迎へて、それから三人で海岸へ来た。もう夏の光は海にも山にも漲つてゐて、砂山の上に佇んで水平線の方を見ると、そこから湧き上つて来る雲の色にも、狂ほしい「夏」の力が潜んでゐるやうに思はれるのであつた。畫家はそれを見るとひどく興奮して直ぐにそこに畫架を立てた。さうして木炭で粗い構圖をするや否や、早くも烈しい油の匂ひを漂はせ始めた。

私達は畫家の興來を妨げることを怖れて、少し離れた砂の上に寢轉んで、言葉少なに語り合つてゐた。そのうち話はまたいつもの通り、この避暑地に住んでゐる女達の月旦になつた。さうするとK君は聲を密めて云つた。

新しい興味に
憧れる心が脈
打つてゐる。

「君、僕はもうNと口を利いたよ。」
私はこの言葉を聴いて、いつもながらわが友の敏捷なのに驚かざるを得なかつた。

「何時、如何して。」

「昨日の朝さ。まあ、聴きたまへ。かう云ふ譯だ。」

K君の話に據ると、彼は昨日の朝海岸を散歩してはからずもNに出會ひ、思ひ切つて何か話し懸けたのださうである。私はその厚顔なのに驚き、且つその無作法なのに呆れた。しかしわが「海豹」はそんなことは何とも思はないで、唯彼の女と口を利く機会を捉へたと云ふことを、心密かに私に向つて誇つてゐるやうに見えた。さうしてその一瞬間私達の間には、稍氣まづい沈黙があつた。

それは全く一瞬間の沈黙であつた。その沈黙はK君の、

心理が細かく
ある。

『Nがこつちへやつて来るぜ。』
と云ふ驚喜したやうな聲に依つて破れた。そこにはこの砂山の方に近
づいて来る、媚めかしい水色の傘があつた。

私はその日始めてNと知つた。さうして私は直ぐに彼の女の快活に
酔はされてしまつた。私達の哀れな「孤獨」は、その後彼の女に依つてど
んなに慰められたであらう。私達も彼の女をその「山莊」に訪れれば、彼
の女もまた私達の家を訪れるやうになつた。

夏が来て避暑の客で賑はつたのも僅か一月で、また直きに以前のやう
な寂寞に返つた。さうして秋が来る時分には、私達の間にも、ひとつの
「事件」が起つてゐた。その「事件」と云ふのは外でもない。K君がNと結
婚すると云ふことなのであつた。

戀を中心とし
て、友情の變
化するのも、
味ひの多い現
實的出來事
である。

私はこの「事件」が起るまで、彼と彼の女との間の關係を少しも知らな
かつた。それだから私は始めて彼からその相談を受けた時には、少な
らず驚き、且つまた少なからず嫉ましく思つた。私の求めてゐた「幸福」
は、遂に彼の得るところとなつたではないか。私は何してこの「事件」に
對して、反感を持たないでゐられやう。私がこの「事件」に關することを拒
んだことからして何時となく私達の交情も、次第に疎くなつていつた。
さうして私は再びもとの「孤獨」に歸らなければならなかつた。

彼等が結婚したのは、それから間もなくのことであつた。敗北者で
ある私は、わが友の幸福を喜ぶのに各ではなかつたけれども、もうそ
こには以前のやうな親しみがなかつた。彼は結婚すると同時に、「時計屋
の二階」から「山莊」に移つた。

かくてこの新夫婦の一舉一動が、鎌倉中に噂の種を作つてゐるうちに、

獨歩の「鎌倉夫人」の主要な場面は、やはり愛を失つた男が滑川へ釣に出懸けてある橋下に座を据ゑて糸を垂れてゐるとそれと知らずに女と男が通りすがるのである。

早くも一年の月日は過ぎてしまつた。

再びもとの「孤獨」に歸つた私は、讀書や思索に倦んだ果は、よく滑川に釣に出懸けた。或る日の黄昏のことである。私がやはりいつもの海濱橋の直ぐ下で釣をしてゐると、聴き覚えのある甲高な女の笑ひ聲が、不圖私の耳に入つた。さうして笑ひ止むと直ぐ、

「もうかうなつたら私何處へでも往くわ。何處か靜かなところへ連れて往つて頂戴。」

と甘へるやうに男に云つてゐる言葉が、明かに私の耳に入つた。それが如何も夫に對して云つてゐる調子ではなく、何だか情人に對して云つてゐるやうに聴こえたので、私はそつと橋の上を見上げて、欄干に靠れてゐる彼等の姿を偷み視ると、それは果してK君ではなくつて、この間

から海濱院ホテルに淹留してゐる、或る富豪の息子であつた。

私の目はもう浮標にばかりは注がれなくなつた。私は唯橋の上の二人の對話に許り心が惹かれて、その言葉を一言でも聴き洩らすまいと思つて耳を澄ました。さうして私はこの時聴いた二人の對話に據つて、略二人の間の關係を想像することが出来たのである。

私はこの時までK君の「幸福」を羨んでゐたのであるが、私はこの時からK君の「不幸」を憐れみにはゐられなくなつた。K君は全く彼自身が云つてゐた通り、彼の女に魅されてゐるのである、言葉を換へて云へば、彼の女に翻弄されてゐるのである。さうして私は彼と彼の女との間に、傷ましい「破綻」の時が近付いて來てゐるのを思つて、彼の死を見るやうに慄然とした。事實私の「鎌倉の友達」は、さう云ふ場合に冷たい短銃の銃口を、その額に當てかねない男であつた。

獨歩の作と、この作との相違は、秘かな戀の男女のそゞろ歩きを見出す當の人が舊の夫であるのと、友人であるとの相違である。この點で、舊夫の心理に執して描いた獨歩の作は女の貞操を呪ふ男の心理が、煌くやうな力をもつて讀者に迫つ

て来る。そこが獨歩の作の強味をなしてゐる。この作には、友人の位置にある心理に立つて描いただけ前者の作に見る煌くやうな印象はない代りに、隠れた現實に對する哀憐の心を味はふことが出来る。そこがこの作の新味である。自らその境地へ置かれるや

うな默想の瞬間である。

人間的味ひの多い作品である。

鎌倉日記

「もう秋の氣が砂にまで染み込んで……」の一節には、砂を煌くやうな夏が去つた

「淫婦、翻弄、破綻、死。」

かう云つた言葉が切れ切れに、私の頭の中を通り過ぎた。私は暗く悲しい默想に落ちた。血みどろになつて殭れてゐるK君の姿が、まさしく私の目に浮んだ。

それからどの位経つたのであらう。私が默想から覺めて橋の上を見上げた時には、もう彼等の姿をそこに見ることが出来なかつた。

果して「破綻」の時が来た。彼は「山莊」から再び「時計屋の二階」に歸らなければならなかつた。彼は再び「孤獨」となつた。

彼は果して「幸福」であつたらうか。私は果して「不幸」であつたらうか。

兎にも角にも私は、再び「鎌倉の友達」が出来たのを喜ばずにはゐられ

なかつたのである。

それから三四年経つてから、私はNが北海道の或る富豪のところへ、片附いたと云ふ話を聞いた。

私が始めて歌集を出した時、「晴露子」と云ふ名前で手紙を寄越した女があつたが、それが如何もNのやうに思はれてならない。それには「札幌」と云ふ消印が捺してあつた。

鎌倉日記

×月×日。

黎明まだ太陽の昇らぬ前に、殆ど一月ぶりで海岸に出た。もう秋の

ことが、それ
となしに云ひ
現はされてゐ
る。

観察がいか
にも細かい。

気が砂にまで染み込んで、踏めば響を立てさうである。思はぬ悪辣な病氣の爲めに、廿日餘りを病床で過ごした身には、曉の風が冬のやうに冷たく、薄情に私の肌を吹いて行く。雨催ひの曇つた空には、鼠色の雲が煙のやうに飛んで、日の出前の銀のやうな光が、空の底に澱んでゐる。海はまだ全く夜の眠りから覺めないやうな様子で、暗い藍色の水の面からは、水蒸氣が懶く立ち騰つてゐる。しかしもう白子漁りの小舟が七八隻、渚からあまり遠くない所に出てゐて、綱を手繰る人影などがよく見える。

僅か二と月見ない間に、海岸の光景はまるで變つてしまつた。あんなに立ち並んでゐた脱衣所の藁小屋は、今はもう影も形もなくなつて、所々に焚火の跡などが、寂しく残つてゐるばかりである。避暑の人々もうみんな歸つてしまつたと見えて、一と月前の賑しさは、もう何處にも

僅かな月日の
推移が、色彩
多く描かれて
ゐる。

秋口によくあ
る雨。

見ることが出来ない。よく美しい人達が徒歩涉りをしてゐた稻瀬川の海
の入口では、鴉が死魚の骸を争つてゐる。

海濱院の前の砂山の下で、海藻を焼いてゐる煙の匂ひが、咽せるやうに私の方に流れて來たので、直ぐに引き返して家へ歸つた。漁師の家の間を通り抜けると、井戸に臨んで青無花果の生つてゐるのが、私の目に快く映つた。何時の間にか霧のやうな雨が、音もなく降つて來たのである。

机の上を見ると二枚の繪葉書が載つてゐる。昨夜見ながら机の上に置いたまゝ寢てしまつたのだ。この二枚の繪葉書を見た時、私はどんなに寂しい心持がしたらう。

二枚とも新富座から寄越した寄せ書の繪葉書である。俊子さん、八千代さん、秀雄君、幹彦君、萬太郎君、水谷君などの人達が、いろんなこ

「格別世を忍ぶ身でもないのに——」かうした言葉に作者の面目がいろくくに偲ばれる。作者の人生観が窺はれる。

とを書き散らしてゐる。劇場の中の華やかな空気が、この二枚の繪葉書から妖氣のやうに立ち昇つて、私の心を魅し私の魂を誘ふのである。格別世を忍ぶ身でもないのに、何故私はこんな鎌倉などに引つ込んでしまつたのだらう。東京に住んでゐてこんな寄書を書いてゐる人達が羨ましい。私も來年の春にでもなつたら、また東京に出懸けて往つて、向島の邊にでも隠棲しやう。世に出るのも厭であるが、世を遁れるのも厭である。

私は寂しくこんなことを考へながら、やはりその繪葉書の隅の方に「れん」「かづ榮」と書いてある、二人の京都の女の名前を眺めてゐた。幻の様に加茂川が見える、蓬の生えた河原が見える、玉蟲色の唇が光つて、だらりの帯の揺れるのが見える。

朝暫らく降つて霽れた雨が、夕方からまた降り出して來た。今日は一

「戀でもないのに窓によつて……」は面白い辭句である。

避暑地のうら淋しい秋にゐて、都會を戀ふる心持のやるせなさ。

日寂しくつて堪まらないので、手紙ばかり書いてゐた。私が鎌倉に來てからの樂しきは、唯手紙ばかりなのである。朝起きてから夜寐るまで、手紙ばかりが切に待たれて、戀でもないのに窓に凭つて、郵便脚夫の來る時を、もどかしく待ち暮してゐると、何だか自分が急に不幸な境遇にでもなつたやうな氣がして、果敢ない心持で床に這入る。浪の音さへもの寂しい。

今日は夜になつたら郵便を出しに、長谷の方へ往つて見やうと思つてゐたのに、雨が降り出したので止めてしまつた。無聊に堪へ兼ねてゐたところへ丁度客があつたので、十時過まで雑談をして、やつと寂寞を紛らす事が出來た。去年こゝへ來た時分には、この寂寞に慰められたものが、今ではかへつて厭はしく、都會の燈火が懐しい。人間の心持と云ふものは、如何してこんなに變るのだらう。

避暑地の街は更けるのが早く、何處かの御詠歌の聲が聴こえて、雨は蕭やかに降つてゐる。

×月×日。

著者の戯曲。
落語家を材に
取つたもので
當時世評の高
かつた名作。

朝起きて机の抽斗を掃除してゐると、不圖目に付いた葉書がある。それは私がまだ三年町にゐた時分、橋場の鈴木さんから來た葉書だ。丁度「俳諧亭句樂の死」を書いてゐた時分のこと、鈴木さんの親切から、馬樂の句を知らせて呉れたものなのである。一枚の葉書にはこんな句が書いてある。

年の瀬や話に残る蜜柑船

新宿へゆく華魁の師走かな

大晦日狸寝入も心から

いたづらに鳥影さすや年の暮

此等の句を讀んだだけでも、あの奇矯な落語家の生活の一面が、仄見えてゐて面白い。もう一枚の葉書にはこんな句が書いてある。

賽の目も忘れて嬉し初日の出

悪い智恵しほる五人や借浴衣

涼しさや唐の大将あやまらせ

藪入や親に似た子の駄法螺吹き

「賽の目」「悪い智恵」の句などは彼の面目躍如たるものがある。

こんな句を見てゐると、飄然として高座に上る、彼の姿が見えるやうである。岡村君と久保田君と私の三人で、最後に彼の家を訪れた時、彼は病苦に窶れながらも床の上に起き直つて、元氣よく話をしてゐたが、譯の分らぬ事の方が多かつた。白玉の話や蛇の茂兵衛さんの話もこの時聴いた。枕元に蠟燭がほんやり點いてゐて、何となく物凄かつたのを覚え

目に見えて秋は来ないが、然し蕭條の氣が早くも迫つてゐる風物に對して、自ら嘆息するやうなやるせなさである。

てゐる。

権五郎神社の裏山では、蟬が懶く鳴き始めた。仕事に倦きて横になつてゐると、いろいろの事が思ひ出されて、取りとめのない空想の中に、私の心は誘はれて行く。病院に這入つてゐた時分の癖がまだ抜けず、懶惰な日ばかりを送るやうになつた。朝から晩まで一字も書かずに、一日机の前に坐つたまゝで、茫然と暮らす時が多い。倦怠は實に苦痛である。私は今最も倦怠を怖れてゐる。

空は何時か荒模様になつて、浪の音が高く轟き始めたと思ふと、雨が烈しく降り出して來た。私は急に蘇つたやうな心持になつて、立つて窓から外を眺めた。長谷の觀音の堂宇の屋根が、山の半腹の繁つた樹の間から、寂びた形を現はしてゐる。その傍に聳えてゐる公孫樹は、まだ黄葉はしないけれど、雨に濡れて立つたところは、如何しても蕭條たる

生活の單調さを、旅行によ

寂しい秋のおとづれに堪へない心持のよく出た日記である。最後の一節もおもしろい光景である。

秋の姿だ。私はもう鎌倉の秋に堪へない。

午後になつて雨が霽れたので極樂寺から稻村が崎の方に向つて見た。雨後の海は銀灰色に光つて、まだ雨を催してゐる鼠色の雲が、低く空を飛んでゐる。岬のところで碎ける浪が、白く輝いて散つてしまふと、またその後から同じやうに、高い浪が押し寄せて來る。

往來で一人の漁師の子供が、鮫を下けて來るのに出會つて、不圖小せんを思ひ起した。今日は厭に落語家の事許り考へる日である。家に歸つてから「五元集」を讀んだ。

湯河原へ

湯河原へ往かうと思ひ立つたのはもう二月ばかり前からの事である。

つて破らうと
する心持は、
微温的な却て
苦しい心持で
ある。

疎懶の結果溢滞してゐる文債を果す爲めばかりでなく、私はもう單調な鎌倉の生活に、つくづく倦怠を感じてゐたので、何處かに旅行をしようかと云ふ欲望は、餘程以前からであつたのである。そこで鎌倉の假寓を引拂つてから、東京に居を卜するまでの數十日を、流離の旅に送らうと思つて、先づ湯河原へ往く事に極めた。そこに到着して二十日もゐたら少しは仕事が出来たらう。さうしたら久しく訪れなかつた京都大阪の方へも往く事が出来るだらう。歸路には奈良、伊勢から木曾路を廻つて見やうなどと考へて、この二三月の間と云ふものは、その事にばかり心が惹かれた。

しかしかうやつて旅の空に憧がれてゐる一方では、長年住み馴れた鎌倉を去るのが名残り惜しくも思はれて、それまでは殆んど散歩にも出なかつたものが、一日に幾度となく濱邊を訪れ、砂丘に佇んでは海を眺め

心持が自然に
出てゐる。

冬近い海が躍
如として見え
る。

た。冬の砂原は荒涼として、とても夏の光景を想像する事が出来ないが、それでももう暫らくして嫩草の萌え始める時分になると、散歩に出懸ける人もあるであらう。今でも少し温かい日の午後なぞには、病人らしい美しい女の唯一人逍遙してゐるのに屢出會つた事があつた。そして私は又例の空想からその女について、種々の小説を胸に描いて、更に鎌倉を去り難くも思つた。

そのうち私の豫定した別離の日が、一日一日近付いて来た。それに私を散歩に促すやうな温かい日は、さう幾日も續かなくなつて雪もよひの寒い風が身を切るやうに吹き始めた。二階の縁側から微に窺はれる海的面には、浪の激して白泡を立てゝゐるのがよく見える。かう云ふ光景を眺めると、まだ春には間のあるやうな気がして、鎌倉にゐるのが心細く早くこの土地を離れたいと思ふと同時に、何處かに旅行をしようと思ふ

欲望が、又新に心を動かすのである。そしていよいよ私が鎌倉を去らねばならぬと云ふ廿日となつた。

私は東京から手傳ひに来て下すつた母上と共に荷物を片付けて、その日の夜に入つてから鎌倉を去つた。家が失くなつたと云ふところから、幾分か漂泊者のやうな悲しい心持を感じながら。

その翌日の午前は私に取つて、かなり忙しい時であつた。朝早く四谷の家を出てから用のある家々を四五軒廻つて、最後に柳町のK君の家に往つた。二階へ通されるとそこに一人の客があつたが、何處かで見つたやうな顔だと思つてゐるうち、それが講釋師の小金井蘆洲氏だつたと云ふ事が、K君の紹介に依つて分つた。同氏は當時斯界の名人で、既に荷風氏も云はれた通り、或る種類の物を讀ませては、恐らく天下第一品であらう。何時ぞや慥か八丁堀で「小夜衣双紙」を聞いた時の事などを想ひ起してゐ

ると、黙つて火鉢に當りながら時々思ひ出したやうに「誰某を御承知か」などと云ふ言葉の調子にも、その藝骨が窺はれて面白い。

この邊が昔の柳風呂の跡なのかと思ひながら窓から外を見ると、今にも降り出しさうな空を劃つて、極めて俗悪なニッポノフォンの廣告が見える。さうすると私の聯想は、蓄音機から浪花節に飛び、それから又この間或る雑誌から訊ねられた、「現代の趣味」と云ふ問題に飛んだ。そして私の獨斷は、要するに現代には趣味なんかないと云ふ事に歸着してしまつた。

私は到頭半日K君の家の二階で暮らした。二十日程鎌倉に引き籠つてゐた間に、東京での出来事はかなり多かつたらしい。N君兄弟の父君が亡くなられたのを最も大きな出来事として、田町のO君の話や駒形のK君の話、それから今は代地のN君の話なども出たが、中にはかなり珍談

大づかみのやうで、而かも作者の面目が十分に偲ばれる。

もあつた。蘆洲氏は三時頃歸つてしまひ、私がK君と共に外へ出たのは、もう街に灯の點く黄昏であつた。日本橋の大通りを檜物町の方へ曲る時分には、さつきからちらちら降り出してゐた雪は、もう往來の土を灰白く染めてゐる。

目を覺ますと直ぐ飛び起きて窓を開けて見ると、小降りにはなつてゐるけれども、昨夜からの雪はまだ歇まない。しかし私は如何しても今日中に湯河原へ往かうと思つて、直ぐに車を新橋の停車場へ走らせた。昨夜の酒がまだ頭の底に重く残つてゐるので、何だか鉛のやうに氣が沈んで屢々鬱憂が襲つて來る。車の上から雪の積つた街の景色を眺めながらも、かう云ふ日に旅に出る己の身を、傷ましく思はずにはゐられなかつた。そのうち私の車は停車場に着いた。そして辛うじて八時五十分の大垣行に乗る事が出來た。私は恰も追はるゝ如く雪に濡れた石段を駆け上

ひとりでに微笑させる比喩

細かい觀察と
いつていゝ。

つた。

汽車の中は殆んど靴を置く場所もない程混み合つてゐた。硝子窓から外を見ると、雪はまだ歇まずに降り頻つてゐて、暗い灰色の海のあなたには斑らに白くなつてゐる品川の臺場が見えた。私は汽車が大森を過ぎる邊からうとうとと熱睡み始めて、茅ヶ崎の邊までは大方夢のうちに來てしまつた。目を覺ますと窓からは淡日が射して、今にも霽れさうな空模様である。そして次第にこつちに來るに従つて、雪の量が少いのか或ひは溶るのが早いのか、土は殆んど黒く濡れたその面を現はしてゐた。私は稍温か過ぎる室内の空氣にうつとりしながら、現はれるかと思ふと直ぐ消える煙のやうな空想に耽つた。そして私の哀れにも愚かな「金々先生榮華夢」の覺めた時、汽車は徐かに國府津の停車場に着いた。故人蝶花樓馬樂をして羅苧屋煙管に譬へしめた輕便鐵道の車は、人を

である。

一人旅の心持
が重苦しく出
てゐる。

荷物のやうに満載して發した。小田原を出る時分から雪は全く歇んで、晩冬の日光も時々々々そそく雲を洩れた。しかし私の胸は再び鬱憂に鎖され始めて、海に臨んで断崖の上を、危ふけに走つてゆく車の窓から、深碧を湛へた相模灘を遠望した時なぞには、不意に死が懐かしくなつた程、妙に感傷的な心持になつてゐたのである。

山には黄色い柑子の實のまだ採り残されてゐるところがあつた。日光は密林の上に斑らに残つた雪に映じて、風景は次第に南國の趣を増した。そして悲しげに汽笛を鳴らしながら、山腹を迂廻した鐵路の上を、車は滑るやうに走つて往つた。私はこれまでに幾度かこの道を往復した事を回想しながら、往時夢の如しと云ふやうな事を考へずにはゐられなかつた。かくて又今日を追懐して、同じ嗟嘆を久しうする時も、いづれそのうちに來るのであらう。

外界の風色の
異なるにつれ
て、旅する人
の變化が微細
に記されてゐ
る。若い鬱憂
に閉ざされた
人の日記であ
る。

窓から流れ込んで來る海の風に頭を吹かせてゐるうちに、心は次第に爽やかになつて、真鶴の邊に來た時分には、さつきまで感じてゐた鬱憂も忘れたやうに消えてしまつた。海を見ると遠くの方を、微に黒煙を立て、ゆく汽船がある。追ふともなくその後を見送つてゐると、何時の間にかその姿は水平線のあなたに消え、唯それに憧られるやうなときめきが、仄に私の胸に残つた。

門川に着いたのは丁度午後の二時頃であつた。私は直ぐに馬車を備つて、湯河原に向つて道を急がせた。馱者の打揮ふ鞭の音は、雪を戴いた山の巔から吹き下して來る、氷のやうな風に鳴つた。兩側の山はだんだん蹙つて、次第に峽谷の形を備へて來た。道がだんだん急になつて來ると、それに沿うて流れてゐる河の姿は、次第に奇聳な趣を加へた。

それから一時間の後、私は浴槽の縁に頭を載せながら、温かい湯の中

作者自らの情
 的生活を、豊
 麗な文章と繊
 細な短歌とに
 よつて歌ひ出
 でた唯美的な
 散文詩であ
 る。

に體を横たへて、哀れな人の身の上などを、とりとめもなく考へてゐた。

水 莊 記

一

私が再び水莊に移つて來たのは、冬の始めのことであつた。一年の間、水莊の姿もいたまじき程に變り果てて、大河に臨んだ私の部屋の裝飾なども、大方は何者にか盜まれてしまつた。雨漏の汚染があさましく残つてゐる壁の前には、花瓶も狼籍のために碎かれて、薔薇が枯れたまま床の上に落ちてゐた。

私は深い細望を感じながら、長い間この部屋の中を見廻してゐた。

枯薔薇一年まへのよろこびもかく枯れ果てぬかなしきかなや
 花瓶は落ちて碎けぬわが戀のかけらもなかにまじりたるべし
 神無月下浣のひと日よかなしみの館にかへる時にふさへる
 わたましの車を引ける水漬の爺にもかかるかなしみありや

私は思はず悲しげに呟いた。

『如何してこんなに變つたのだらう。』

さうして徐かに窓の傍へ歩み寄つた時、私の心は再び絶望を感じずにはゐられなかつた。あの密林はいたましくも荒れ果てて、河の面に映る樹の影も寂しく水に動いてゐるばかりである。巢を壊たれた鳥のやうな心持で、私は水莊の中を歩き廻つた。さうして厨の傍に來た時、私はまたここにも悲しい出來事を見なければならなかつた。

先づ荒廢の氣
 が逼つて來
 る。

美しいロマン
スの暗示を見
出す。

かなしみの色もすべていろどらるわが水莊もわれの心も
何時の間にかくは變りしわが家ぞ日光さへもかなしけに射す
わが戀の古巢はかくてこぼたれよ君かへり來る時もあらねば

私の目がはからずも柵の上になつて注がれた時、あの不思議な鳥の籠が、置
き忘れたままになつてゐるのを見て、私は驚愕の目を見張つて思はず立
留つた。さうしてあの鸚鵡の不幸な運命を危ぶみながら、怖る怖る籠の
中を覗き込んだ。哀れにも鳥は痛ましき死骸となつて、籠の底にその身
を横たへてゐた。併し、怪しいことにはその翼は、生きてゐた時よりも
更に美しく私の目に映つた。

戀びとはよそを思はずあはれにも忘れて往きし青き鳥籠

わが君は鳥のごとくに歌ひきとまたおもひでの涙ながしぬ
いたましき晝の夢かとうたがひぬいとうつくしき戀のなきがら

「鸚鵡の死。」

それは何ごとか暗示してゐるやうに思はれたので、私は黙つてその死
骸を凝視めてゐた。しかしそれが何でもないことと云ふことを知つた時、私
はその籠を擁へて徐かに玄關の石段を下つた。さうして夢のやうな日光
を身に浴びながら、この鳥のために呼び起された回想に耽つた。

わが君の愛でたまひたる鳥なれば死にても翼うつくしきかな
悲しけに夢のむくろのよこたはる傍に立ちものを思ひぬ

テリケート
な描述を見
る。

憂鬱な重々し
い心持が味は
れる。

日光がいとやはらかに降り、そそぐなかを歩めば夢覺めずけり

何時か私は大河の岸に立つてゐた。その面は灰色に濁つてゐて、雲の影さへも映らない。水際の泥の上に家鴨の足跡が謎のやうに續いて、遠く白楊の樹蔭の中に消えた。何に驚いてか銀色の魚が水の上を飛ぶと、その微かな響までが何となく人を脅かすやうにすさまじく聽えた。私は黙つて鸚鵡の死骸を見た。さうして私は黙つて大河を見た。

『運命。』

私は心の中でかう叫んだ。

濁りたる水のいろこそ堪へられね河邊に立ちて君をおもへば
水際の白楊の葉のわななきを見てとめどなく涙ながれぬ

冬の日のしろがね色の愁深く大河を見てかなしめるひと

私が廢園の中に入つて、この鸚鵡のために小さな墓を造つたのは、もう薄暮に近い頃であつた。樹の間から斜めに射して來る夕日の光は、烈しく顫へながら土の上に落ちた。地には朽葉が金の如く散つて、涙のほひが何處からともなく漂つて來た。ああ、この涙のほひをあの侍從武官の娘は、どんなにあの時喜んだであらう。

やはらかに樹蔭を洩れし過ぎし日の聲をもとめて廢園に入る
月ささばその夜のごとく軽らかに落葉を踏みて君來るらむか
地に落ちてともに悲しくにはひけり君の涙とわれの涙と
いまもなほ君の吐息の聽こゆるよ樹の間を洩れて夕日さす時

形にして捉え
ようとすれば
すぐ掌の中か
ら通れてしま
ひさうな機微
な情趣があ
る。

その夜は、曉近くまで私の部屋の窓には灯が点つてゐた。私はその蠟燭の光に堪へがたき鬱憂を感じながら卓子に向つて痛ましき黙想を續けてゐた。あの工兵中尉は如何したであらう。さうしてあの侍従武官の娘は如何したであらう。哀れなる蛾よ。冬の力におののきながらも、何故私の沈思を破りに來るのか。

新しき曉、いまだおとづれずわが水莊の窓のそとも
蠟燭の光を君はよろこびぬたそがれ時の夢に似たりと
蛾は云ひぬ窓のうちなるわかうどは夜も寐すひとり何に惱むや

夜半から風が吹き始めて、窓の玻璃は幾度か鳴つた。私はその度ごと

「夜」の横顔の
怖しいのに戦
慄した——と
いふ一句には
新しい形容か
ら與へられる
新しい感銘が
ある。

に窓の外の闇を眺めて、「夜」の横顔の怖しいのに戦慄した。蠟燭は燃え盡きさうになつて、焔が青く瞬き始めた。私は夢から覺めた人のやうに、遽かに椅子から起ち上つて云つた。

「さあ、もう眠らう。さうして明日はこの水莊を、またもとのやうに裝飾してやらう。」

風吹けばはかなくもの思はるる子となりたるも君あらぬため
かなしみに堪へざる如くうなだれし夜の横顔をひとり凝視むる
何時までも愁は盡きじかくあるも詮なきこととしてや眠らむ

二

翌日私が目を覺ましたのは、もう正午に近い時分であつた。日光は冷

何處かおどけ
たやうな、而
も小鳥の羽敲
きのやうな歡
喜が、そのま
ゝに現はされ
てゐる。

やかに窓帷の間から部屋の中に流れ込んでゐた。私は寢臺の上に靜かに横はつて、窓帷のあなたの晝の姿を想像して見た。冬の始めとは云ひながら、太陽は今日も黄金のやうに輝いて、野や林の上に生命のやうな光を漲らせてゐるのであらう。

目覺むればわが寐姿のあはれなるさまにもひとり歎かれしかな
愁をば消さむとするやわかうどはかのうつくしき晝を眺めて
日光は森にも野にもみなぎりぬそを見てしばし涙忘るる

私は起き上つて窓を開いた。さうして待ち設けてゐたやうな光景に出會つて、私の心は小鳥のやうに烈しく躍つた。私は長い間窓に靠れて、銀のやうに輝いてゐる大河の面を眺めながら、靜かに「幸福」の忍び足に

濃かな情趣の
湧き出るやう
な歌。

近寄つて來る聲音を聽いた。さうしてそれが何時の間にか轍の響と變つてゐるのに氣が付いた時、私は覺えず窓から身を伸して云つた。
『おや、幸福は馬車に乗つて來るのか知ら。』

わが胸のかく躍れるはなにゆるぞ傍にかの君もあらぬに
河の面はわが胸のごと輝きぬいづれは夢の影もさすべき
さひはひよ汝を待つこと久しとて伸ばす腕もわななきしかな

轍の響は蹄の音を交へて近寄つて來た。私は怪しく胸のとどろくのを感じたので、それがこの水莊を訪れる馬車ではあるまいかと疑ひながら、慌ただしくも玄關の方へ走つた。さうして林の中から現はれて來る賓客の姿を心に描いて、貴人を迎へるやうな心持で待つてゐた。

「輕車肥馬なる奢もて……」
は、口調がいゝばかりでなく、いかにも貴族的な振舞を躍如と浮び出させる適確な言葉である。

（あはれなる男よ。「運命」の車の轍の響が、お前の耳にはそんなに快く聴こえるのか。）

日ざかりの林のいろの濃緑の夢のなかより君は來よかし
誰が子ぞ輕車肥馬なる奢りもてこの水莊をおとつれて來し

まろうどはいとうつくしき少女にてあれよと云ひぬわかき主人は
「運命」の車と知らず待つひとはあはれや戀もつたなかるらむ

烈しい鞭の音が聴こえると共に、並木つづきの驛路の上に輕快な馬車が現はれて來た。白馬の嘶きが嵐のやうに林の中に傳はつて、轍の痕には白い砂煙が陽炎のやうに残つてゐた。さうして私の目がその馬車の上に注がれた時、私はどんなにか驚かされたであらう。

そこにはあの侍従武官の娘が、一年まへと少しも變らぬ姿をして、一人靜かに座つてゐた。

紋章も消えてあとなきわが門を君ならずして誰か尋ねむ
砂けむり黄なるはいとど眩ゆかり幻としも思ひたまふな
うつくしく白馬は汗に濡れにけり蹄のしたのどくだみの花

馬車は水莊の門の前にその轍を留めた。馭者は臺の上に鞭を投げ棄てると直ぐに、その主人を扶け下すために地に降り立つて、恭しく女の方へ手を差し出した。女はその手に縋つて二三歩足を運んだ。さうして門を潜らうとする時、始めて玄關に立つてゐた私の姿を認めて、急にそこに立ち疎んでしまつた。馭者は烈しく顔へる女の身を兩手で支へながら、

破れるばかりな感傷的な心持が籠つてゐる。

「夢の香は塵のほひに交つて」といふ描述は、この作者一流の唯美的表現の一例である。

驚いたやうな眼差で二人の顔を見競べてゐた。

馬ぐるまひろけし幌と水莊の壁とばかりは緑なれどもをどけたる馭者なりしかな頬を撫でて戀びとのごと馬にも云ふいなづまはわれら二人をのみ射りぬ君が目わが目ふと合ひし時ああながく見るに堪えむや黒髪のみかりもいたく失せたるものを

馭者の手から私の手へ女の體が移された時、私はまるで「悲哀」を腕に抱いたやうな心持がした。かくて私はこの歎歎する女を擁へたまま、靜かに客間の扉を押した。夢の香は塵のほひに交つて、悲しくも私達の方へ流れて來た。女はこの時始めて口を開いた。

『まあ、すつかり荒れてしまひましたわね。』

悲しきは女のみかはうらわかき男の身こそなほさらにあれ

君が足床を踏む時けがれたり昔の夢の塵おほきため

荒れはてぬ水莊のみか心まで心ばかりか戀のゆめまで

水莊は長く女の聲を聴かなかつた。今黄金のやうな女の嗟歎を聴いて、彼はどんなに感謝の意を示さうとしたであらう。一年の間閉ざされてゐた窓から再び外光が流れ込んだ時、女の姿ばかりは壁から浮き出しているやうに、一人輝いてゐるのが私の眼に映つた。しかし、それは唯背景の悲しみを増したのに過ぎなかつた。

水 莊 記

感觸の美はしい歌。

古びたる悲哀の壁のまへに立ちながくあるべき君の姿か
灰色の光を負ふて來りたる少女の肩に手を懸けにけり

心の實感を、
外界の事象で
巧みに言ひ現
はした歌であ
る。

冬ふゆの日は冷つめたき金きんを撒まきにけりおとろへし子こはその金きんを踏ふむ

氈かの上うへには窓まきから吹ふき込んだ橡ももの葉はが、まるで庭にはのやうに散ちつてゐた。
私わたしが三さん個この窓まきを開ひらいてゐる間あひだ、女おんなは黙だまつて部屋へやの隅すみに佇たふんでゐたが、私わたし
は殆ほとんど抱いだくやうにして、長椅子ながいすの上うへまで女おんなの身みを運はこんだ。僅わずかかに七尺しちやく
にも足たらぬその間あひだを、私わたしはどんなに長ながいもののやうに思おもつたであらう。

影かげふたつ戀こひびとのごとむかひるぬ荒あれたる部屋へやの薄明はくめいのなか
しばらくはかたみに顔かほを反そけるぬ君きみのおとろへ我われのおとろへ
河氷かはこほりをりから裂さぐる音おときこゆかなしき胸むねの傷きずにひびきて
かなしみに言葉ことばもあらず潤うるみたる目めこそは語かたれ胸むねのおもひを

女おんなは長椅子ながいすの上うへに倒たふれ伏ふして、一時間じつかんあまりも聲こゑも立たてずに泣ないてゐ
た。私わたしは慰なぐさめやうとするでもなく、黙だまつてその痛いたましい姿すがたを見みながら、
静しづかに過くわ去この回わい想きやうに耽かひつてゐた。日光にっこうの明暗めいあんの烈はげしい日ひで、私わたしの心持こころもちも
それとともに變かはつた。二人ふたりの沈黙ちんもくが坑あなのやうに深ふかくなつた時とき、突とつ然ぜん戸口とぐち
にあの馭者ごしやが現あらはれた。さうして恐おそる恐おそる女おんなの傍そばへ近ちか寄よつて云いつた。

『若奥様わかおくさま。一寸村ちよつとむらの居酒屋いざかやまで往いつてまゐりたいのですが。』

沈黙ちんもくはやがて涙なみだをいざなひぬ涙なみだはやがて夢ゆめをさそひぬ
うつくしき少女せうとめのごとくわが前まへに冬ふゆの月つき來きてさめざめと泣なく
君きみが肩かた漣せせなみ、うちぬあはれ今いまいたいたしくもこころ泣なくらむ

馭者ごしやの口くちから「若奥様わかおくさま」と云いふ言葉ことばが洩もれた時とき、私わたしは驚愕おどろきのあまり椅子いす

から起ち上らずにはゐられなかつた。私は女と馭者とをこの客間に残したまま急いで私の書齋に入つた。さうして窓を押し開けて、訴へるやうに大河の面を眺めた。音もなく流れてゐる水の上を、一群の鳥が悲鳴しながら過ぎた。

某の夫人よ。再び侍従武官の娘となるまで、また水莊を訪れたまふな。

おそろしき嫉妬をいまは覺ゆるよわれとわが身がわかずなるまで窓を押しあくる手さへもあらあらし玻璃戸に恨あらざるものをわがまへのありとあらゆるものをみな忘れてひとり君を恨みぬ

三

室内の空氣の
息苦しさが濃
かに味はれ
る。

女は何時か私の書齋の中に立つてゐた。さうして沈黙も女とともにここに來た。まるで「運命の窟」を思はせるやうに、極めて空虚な極めて暗黒な沈黙は、再び私達の上を蔽つた。時々河風が窓に當つて、玻璃の戸は微かに鳴つた。長く火を燃さなかつた暖爐には、一年まへの灰燼が白く残つてゐた、まるで私達の戀のなきがらのやうに。

戸の外は河風さむしあはれにも馭者のあくびの聽こえ來る時

この暖爐あたたかく燃えわれらまたあたたかく燃えし夜半やかへらぬもの云はぬその唇は吸はざらむいかにわれをば強ひたまふとも

女は懺悔するやうな調子で一年間の閱歷を語つた。水莊からその家に歸つた時、彼の女は父の激しい怒りに會つて、その後半年の間は門から外

へ出ることも許されなかつた。彼の女は檻のやうな家の中に住んで、空しく過ぎて行く時を歎いた。さうして彼の女は遂にその父の云ふままに、新しい子爵夫人とならなければならなかつた。

『子爵夫人。』

かう心の中で呟いた時、私は思はず痛ましい冷笑を頬に浮べた。

戀びとはおほかた檻のなかに住む黄金の柵はまばゆけれど

目覚めたる女はすべてあやふかり門を出づなと錠られける

思はざるひとを思へと云ふことにまさるかなしみなしと思ひぬ

冷笑の頬にのほりしはなにゆるぎ君をわらふや我をわらふや

数時間は経過した。眠れる戀はこの日再び目覚めた。私達は一年まへ

のやうに抱擁した。さうして私達は一年まへのやうに接吻した。女は蘇つた人のやうに喜んで、その柔かい腕を私の頸に巻きながら云つた。

『私はもう家へ歸らないわ。』

君が胸わが胸合ひしよろこびに今か昔の戀かへりきぬ

手を取れば手は火のごとし痛ましくかなしくしばし放ちかねつも

黒瞳焔のごとくひらめきぬそのひらめきに身も焼くる時

二人で暖爐に火を焚くと云ふことさへも、私達に取つては喜ばしいことであつた。次第に熾んに燃え上る焔を凝視めながら、女は何を考へてゐるのであらう。私の手を堅く握り締め、解きがたき謎のやうな微笑を洩らしてゐるが、暫くすると石よりも冷かな表情が、その顔の上に現

刹那の熱した
女の聲が聞え
るやうであ
る。

はれて来た。

あたたかに暖爐の燃ゆる日となりぬふたたび戀がかへり來しより
音立てて焔も燃えぬわかうどは暖爐のまへに口笛をふく
解きがたき謎と思へばおもしろしつめたたく光る君が瞳も

私はその表情を認めると同時に、急に女の手を振り離れた。さうして
椅子から立つて窓際まで進んだ。玻璃戸を開かうとした時、私は背後か
ら女のために抱き留められた。さうして狂ほしく叫ぶ女の聲を聞いた。
『開けちやいけない。開けちやいけない。』
私は女の強き力のために引き戻されて、何時か再び椅子の上に腰懸け
てゐた。しかも二人は一個の椅子の上に。

なにももののかかる冷たきものありてわれの心に觸れむとはする
部屋のかなかなしみに満つ河風をしばし入るべく窓をひらかむ
二人凭れば戀の重さも加はらむ椅子もあやうく思はれしかな

私達は長い間黙つて甘い呼吸を楽しんでゐた。しかし、私の心に起つ
た疑惑の念は、女に或る問を發せずにはゐられなかつた。私は女に何故
窓を開いてはならぬのかと云ふことを訊ねた。女はそれに對しては唯
唇を以て答へただけであつた。怖らく戀に心の燃えた女の身として寒
い河風を厭つたのであらう。

戀びとは呼吸もかをりぬうつくしき素馨の花の匂ふごとくに

作者の情調の
美はしく漲つ
た歌の一つ。

過去の戀を悲
しむに適はし
い一ト時。

冬の日の河風いかに寒からむ瀬のこゑ水にひびきて
風さむく窓の玻璃戸を鳴らせるはわがうつくしき戀をねたむや

その日の夕暮近く、雲が寂しげに降り出した。風が吹く度ごとにさらさらと窓の玻璃に觸れて、微かに銀を鳴らすやうな響を立てた。この時私達は机の上に積み重ねた数多い手紙の中から、「過去の悲哀」を見出すことに心を委ねてゐた。艶書は殆んどこの女から來たものばかりであつた。しかし、たまたま他の女から來たものが見出された時、女は何時もそれを讀み終つてから破り棄てた。その手紙を裂く音は黄昏になるまで私の書齋の壁に響いた。

文がらはいとうづたかしあはれなる戀のかたみに涙流るる

夕雲窓にみだれぬかかる日に文を破るも悲しからずや
船唄も聴えずなりぬさらさらとうす雲する響のみして

女を送り出した時は、最早日没の後であつた。雲はまだしめやかに降つてゐたが、何處にか薄明の漂つてゐる夜である。私は馬車の中にいぎたなく眠つてゐる馭者を揺り起して、直ぐに出發の身支度をさせた。私達が別離を惜しんでゐるのを見て見ぬ振で、馬の鬣に溜つてゐる雲を拂ひながら、馭者は濁聲を張り上げて叫んだ。

『さあ、早くお乗りにならないと、お歸りが遅くなりますぞ。』

別るるは死ぬにひとしと云ひたまふ言葉にまたも胸迫りきぬ
冬の夜の都にとをき枯木立馬車のなかにて泣くは誰が子ぞ

さらばわが最愛びとよろがねの少女よさらばしほし別れむ
薄明のなかに消え去る君よりも悲しきものはなしと思ひぬ

四

その後村民等は水莊の門の前に、屢あの軽快な馬車が駐まつてゐるの
を見ることがあつた。彼等はそれを見る時、何時も意味ありげに微笑し
ながら、常に居眠りをしてゐる馭者を嘲つて通り過ぎた。

『愚かな馭者。』

この言葉は何時の間にか村中に傳はつた。さうして私は林間や河邊を
逍遙する時にも、何處からか彼等の私語が聽えて來るやうに思はれた。

朝起きてひとり心に占ひぬ今日はたいかに君のおとづれ

君とともに野路を歩めばうしろにて農夫のわらふ冬の靄かな
ただふたり河邊に立ちても思ふことも日ごとのならひとなりぬ

丁度この時分から私の胸にはもう一つの戀が始まつてゐた。それは或
る女畫工との間に起つた出來事で、今二人がかう云ふ戀に落ちると云ふ
ことも、既に三年まへの夏から運命附けられてゐるのであつた。
私はその女から日毎來る手紙を、幾度も繰り返して讀んだ後で、私の
抽斗の中へ入れて堅く鍵を懸けた。若し侍従武官の娘、あらず、子爵夫
人に見付かると大變であるから。

わが君とまづ目に入りし文字ゆるゑに心みだれぬ戀しきかなや
抽斗にあふれんとする文の數百通にして春は來にけり

三年まへの夏のことなど思はれぬ砂のひかりや潮鳴の音
運命のみちびくままに來しのもかふたたび戀に落ちし二人は

冬の終りに近付いた頃から、女畫工からの消息は更に數を増して來た。朝の文、夕の文、それは日々の常であつた。或る時は曉に來た消息を讀んで、目覺めたままに散歩に出ると、道で郵便脚夫からまた手紙を渡されて、林の中で封を切つたこともあつた。或る時は黄昏に夫人を送り出した時、はからずも玄關に投げ込まれてあつた手紙を見出して、それを讀みながら長椅子の上で寢てしまふと、烈しく門を敲く郵便脚夫のために夢を破られたこともあつた。

朝の文のうへの文と消息も日ごとに繁くなりまさるかな

つぶやきぬこの河邊よりかの林しづかに君が文讀むによし
戀知らずあらしくも戸を敲く冬の夜半の文づかひかな

ああ、女畫工よ。卿と始めて相見たのは何時であつたらう。私はここで讀者に三年まへの出來事を語つて置かう。

或る避暑地へ走る瀟車の一室には、女畫工と私と唯二人乗つてゐた。この日始めて會つた二人であつたけれども、瀟車がその避暑地に近付いた時分には、まるで戀人のやうに頬を寄せて語つてゐた。隧道に入つて急に暗くなつた時、女の口が私の耳の傍で叫び出した。

『今夜は是非うちの別荘に泊つて下さいね。』

君が聲車の音にかき消さるこのかなしみを誰か知るべき

みな人の長しといへる隧道もあまり短くおもはれしかな
わかうどは酔へるかごときこちして君が言葉に誘はれにけり

私はそれから二月の間をこの避暑地で暮らした。夢のやうな晝と夢のやうな夜とは交る交るに私達を訪れた。目覚めてゐるのか眠つてゐるのかわからぬ時を二人が送つてゐるうちに、海岸にある砂山は幾度か暴風のためにその形を變へた。

『砂山へ。』

何時も二人はかう云つて莊園の門を出た。さうして松林の中の路を一里あまりも歩いて、墓のやうに悲しげに輝いた砂山の上に立つた。

砂山のふもとにありし向日葵の咲く日をまぢぬ君と見るべく

神秘的な趣のあるシーンである。

夏の日にはべんがらいろに沈みたりあなおもしろと君のながむる砂原のうへに燃えたる陽炎のなかに消ゆべき君にやはあらぬ晝の夢夜の夢いづれうつくしき覺めたるのちはいづれ悲しき

しかし、この幻のやうな生活も、そんなに長くは續かなかつた。或る日二人が砂山の上に寐轉んで話をしてゐるところに、一人の旅人が通り懸つた。靈場詣のために漂泊をしてゐる人のやうに、白衣を着た老人であつたが、突然私達の傍へ歩み寄つて、女に一筋の黒髪を望んだ。祝福か、呪咀か、それを尋ねる間もなく、女は直ちに一筋の黒髪を抜いて、その老人の掌の上に置いた。

運命の翁のごとき旅人よいづこより來ていづこへ往くや

瞬間的に現はれた女の優しさ、美しさが躍るやうに歌はれてゐる。

おそろしきことのみ思ふ日もありぬ砂山に寐て君とかたれど
黒髪の潮に濡れしひとすぢを燕にやろと投げにけるかな

私達はそれから七日の間その砂山を訪れなかつた。唯莊園の中に引き籠つて、人に會ふと云ふことさへ怖れた。さうして二人はひたすらあの翁のことを忘れることに努めた。しかし、それが如何しても忘れることが出来ないといふことを知つた時、私達は顔を見合はせて殆んど同時に云つた。

『さらば、君よ。』

莊園の夏もかなしくなりにけり戀ゆる門を閉ざされし身は
裏山によき泉あり口移しするをよろこび通ひけるひと

くちづけも晝は人目をはばかりぬ窟のなかに君とかくれむ
別るべき時來ぬと知り別れずば禍あらむ君がうへにも

三年まへの出来事は、今私が語つただけですべて終つた。私はそれから都に歸つて再び寂しい生活に入つた。さうしてゐるうち不圖したことからこの水莊に住むやうな身になつたのである。

私は三年まへにあの避暑地の停車場で別れてから、一度もその女畫工に會はなかつた。それだから或る日受取つたその女の手紙の中に、明日水莊を訪れるといふ文字を見出した時、私の胸はどんなに顫へわなないたであらう。

あはれなる水莊守となりにけりかなしき戀のおもひでのため

はなたれて舊巢へかへる春の鳥そのごとくにも都へかへる
 残りしは砂山の香か君の香かなにはともあれなつかしき香よ
 晝はただ林を歩み夜はただものを思へる水莊のひと
 さひはひにまたも相見む日をおもひかの獅子窟に入らざりしかな

五

水莊の生活は二人の女のために亂された。私は朝に侍従武官の娘を送り、夕に女畫工を迎へなければならなかつた。私はこの二人の女が同時に水莊を訪れるのを怖れて、ひたすらそのことにのみ心を勞した。さうしてこの間に見出す微かな快感を樂しんで、何時しか深い生命のよろこびを忘れた。

春は來た。しかし、その春は私には唯陽炎のやうに思はれただけであつ

た。

ふたなさけ二人をおもふ戀のためわが身ひとつの置きどころなき
 とりどりにうつくしければ棄てがたし春の女よ秋の女よ
 日と月と一時におなじところより昇るがごとき戀もするかな
 春は來ぬまた新しきわかき日はわれらがうへにめぐり來ぬるよ

私が春の悲哀を感じ始めたのは、或る女畫工とともに大河の流るる響を聞いた時からである。私達は軽い疲勞を快く味ひながら、窓に近い椅子に凭つて、絶えては續く密語に耽つてゐた。青銅の燭臺に蠟淚が乳のやうに流れて、燃え盡きんとする焔は風に煽られる度毎に青くなびいた。その時その火を凝視めてゐた女の眼は、次第に星のやうに露んで、

遂にそれを見るに堪へなかつた。

うつつなきわれもはじめて驚きぬ或る夜おほえし春のかなしみ
君が目もいたくうるめり夜の灯はなにゆゑかくは涙誘ふや
蠟燭もわれらとともに歎くらむ焰も白くしめり靡きぬ

女はかくて眼覺めた人のやうにその火を指差しながら叫んだ。

『まあこの火を御覽なさい。これが私達の運命ぢやありませんか。』

さうして女は猶も確めるもののやうに私の方を振り向いて、私の答を待つやうな表情を示した。

ああ、この時私は何と云つたら好いのであらう。私はそれに答へる言葉が女の悲哀を誘ふのを怖れて、唯領きながらも痛ましく笑つた。

女に對する秘
かな二重心理
が、痛しく現
はれてゐる。

かなしげに女は火をば指差しぬやがて消ゆべきことをしめすや
頼なき眼差なりやそれもまた戀するひとのならばしにして
もの云へば涙や落ちむ切なくも黙したるこそ苦しかりけれ

そのうち私は悲しむべき出来事に遭遇しなければならなかつた。

それは或る日の薄暮のことであつた。私は假睡をしてゐる侍従武官の娘を私の書齋の長椅子の上に残して、一人靜かに苦に滑らぬやうに足を運びながら立關の石段を降つた。さうして林間を逍遙するため門を出やうとして、その前に待つてゐる馬車に目を注いだ時、私は馭者が見慣れぬ男であるのに心付いた。

じだらくに白き腕を投げ出せしなまめかしさよ君がうたたね
 たはむれに疲れぬ戀に倦みはてぬ林に入りても思はばや
 もの思ふしばしの暇をあたへよと君に乞へども許されぬかな

その男は馭者臺の上で頬杖をしながら居眠をしてゐたらしかつたが、
 私の登音を聴くと振り返つて栗鼠のやうに狡猾な眼差で私の方を見た。
 さうして急に馴れ馴れしげに微笑しながら云つた

『檀那。お楽しみでございますね。』

この無禮な言葉を聴くと同時に、私の身はすべて憤怒となつた。直ぐ
 に彼の傍に置いてあつた鞭を取つて、その青天鷲絨の上着の脊から横頬
 へ懸けて、極めて烈しい一撃を加へた。

いやしげに戀をわらへる下司のため君を棄てむと思ひ立ちにき
 怒りたるのちの心はすがすがし暴風ののちのおほうみに似て
 戀としも知らで日々したがふやおろかなるかな君の僕は

馭者の怨みは遂に私と侍従武官の娘との間を遠けた。彼は家に歸ると
 直ぐ私達の情事をその主人に密告した。かくて女は再び水莊を訪れるこ
 とが出来なくなつた。

しかし、これは私に取つて悲しむべき出来事であると同時に、喜ぶべき
 出来事でもあつた。それからは私は女畫工をこの水莊に迎へるのに、何
 の恐怖をも感じなくなつたのである。

戀びとの犯せし罪はうつくしき神も犯せし罪とこそおもへ

あかつきの夢のなかにて別れたる君もかへらずなりにけるかな
水莊をふたたび尋ねたまふなどかはわれの君に云ふべき

私達は晝も夜もあの大河を眺めて、その面に映る雲の形のやうに變る
二人の心を搜り合つた。この靈魂のたはむれに溺れて、時を忘れ日を忘
れた私達は何時か暮春になつてゐるのも知らなかつた。

『暮春。』

或る日このことに心付いた女は急に歎息をし始めた。さうして急に私
の抱擁の手を振り離して、玄關の石段を瞬く間に駆け下りたかと思ふと、
狂つたやうに林の中へ走り入つた。

大河の水のおもてに映りたる雲よりわれの戀ははかなし。

あはれにも悲しき戀にほろぶ子のおほきを歎き「春」は泣くらむ
ああ暮春われらが戀もをはりぬと河をながめてひとり悲しむ

六

私が後を追つて林の中へ走り入つた時、女の姿はもう樹蔭に隠れて見
えなかつた。私は不安に胸をとどろかしながら、次第に林の奥へ進んで
往つた。雨が霽れたばかりなので、樹はすべて濡れてゐた。枝を潜る度
毎に、私の頬に冷たい雫が落ち懸つた。私は水を浴びたやうな姿となつ
て、ひたすら林の中に女を求めた。

この林かつては君が軽車をば飛ばせし路も通ひけるかな
日はさしぬ木の葉はすべて輝きぬわがかなしみもともに明るし

「風となりて
……」の下の句
に、戀慕のや
るせなさがあ
る。

林のき樹々の葉に立ち濡れぬ涙を浴びしこちしつとも

わかれてはまたかなしみに堪へがたし風となりても君を求めむ

女は遂に見失はれた。私は終日林の中を捜し歩いたけれども、その足痕をさへ發見する事が出来なかつた。風の音を聴いても鳥の聲を聴いても、女のこのことのみ思はれた。私はまるで狂亂したやうな様子で、樹の間を烈しく走り廻つた。

「君よ。」

私は幾度かかう悲しげに叫んだ。しかし、これに答へるものは誰もなく、その聲は空しく風に流れて往つた。

君あまりうつくしければ微風に吹かれてもなほ消え失せやせむ

林をばつらぬき流るる小川あり雨過ぐる時白く光りし

狂へるやわれとわが身を知りがたしたただひたすらに君を追ふかな

あまたたび君よとわれは叫びにき聲は空しく消ゆといへども

私は何時の間にか林の底に立つてゐた。小さな空地が寂しくそこに横はつて、雑草が氈のやうに廣がつてゐる中に、白い花が夢よりも淡く咲いてゐた。さうして私は誰かその上に倒れ伏して泣いたのではあるまいかと思はれる痕を見出した時、堪へがたき悲哀を感じなくてはならなかつた。

わが君の涙のあとに花咲かば泣死草と名をば呼ばまし
陶器のくだけを地に見出でたり或は君のなきがらならむ

或るひとは林の奥の空地をばこのむ或る日の或ることのため

私は倒るるが如く地に伏した。さうしてまるで祈禱をする人のやうな形をして、両手で面を蔽ふたまま長い間泣いてゐた。草の中に身を埋めてゐるうちに、露は私の心までも濡らした。寂寞は林の中に満ちて、唯遠く微かに大河の流れる音が聴こえるばかりであつた。

私が立ち上つたのはそれから一時間の後であつた。私はまるで魂を失つた人のやうに踉蹌として歩み始めた。漸く林の外へ出た時私は一種の恐怖の表情で獨語した。

『如何してあの女は林の中へ入つたのだらう。』
かくて私は唯一人悲しげに水莊に歸つて來た。

同時に二人の女に對する戀愛は、何等の道義的苛責をもたらさない代り、美しい詩的情懷を残して閉ぢられた。そこに作者獨自の

地に伏して泣きぬこのまゝ呼吸絶えよ君うしなひて何に生きむと
ああ涙わが心より流れ出で君が心へゆくよしもがな
大河の流るる音を聴きしよりやうやくわれの胸もなごみぬ
いたましく茨に足も傷つきて棄てられびとはよろめきて來し

私は一人うなだれたまま玄關の石段を昇つた。さうして私は昨日までの樂しかつた生活を思つて、今の貧しい心を感みながら、如何してこれからの日を送らうかと考へた。ああ、もう水莊は「生命の家」ではなくなつてしまつた。二人の女は私を唯一人この光の消えたやうな家に残して、何處へ往つてしまつたのであらう。

私は大河に向つた窓に凭つて、何時までも何時までも「運命」と云ふ事

唯美的生活が認められる。この一篇の價値も勿論そこにある。

冒頭から、何かしら一場の爽やかな出来事を待ち設けずにはゐられない。

を考へてゐた。

昨日まで華やかなりしわが夢も跡なくなりてあはれなるかな
わがわかき生命の家はこぼたれぬかなしみの巢といづれなるべき
大河を見てはわが身の運命をうらなひしかなあはれなる子は

復 讐

「僕は一度こんな女に出會つたことがある。」
若い彫刻家は快活な調子で語り出した。晩夏の或る宵を公園の中の喫茶店に集まつた四五人の青年は、またいつもの戀物語を聴かせられるのかと云つたやうな眼差で、一時にこの彫刻家の方を振り向きながら口々に叫んだ。

「ふん。それは一體どんな女なんだ。」
「またいつもの女のことぢやないのか。」

「あの女の話ならもう御免を蒙るぜ。」

「接吻に始まつて接吻に終るのに極まつてるのだからなあ。」
しかし、この若い彫刻家は唯微笑しながら首を振つたばかりで、直ぐにその物語を始めたのである。

復 讐

いづれの歌にも若々しい心にのみ映する新鮮な情趣がある。

戀がたりするにふさへる夏の夜の宵闇にこそかなしみはあれ
夏深くかなしやと云ふわかうどの瞳うるみて夜となりぬる
夏の夜の空にかがやく星よりもおほき女のもののがたりかな

作者特有の官能味に富んだ描述を見るであらう。

私(彫刻家)がその女に出會つたのは、今から三年ばかり前のことである。丁度春季の展覽會がこの公園の中の或る建物で催されてゐる時だったので、私は一日に一度は必ずこの喫茶店に来る習慣になつてゐたのだつた。さうして来る時刻も腰懸ける椅子も大抵極まつてゐたものだから、ここの女給仕も何時もその時刻になると、その椅子を取つて置いて呉れるやうになつてゐたのである。

見給へ、そこに列んでゐる櫻の木を。その時は丁度その花の眞つ盛りで、日光が夢のやうに輝いてゐる晝間などは、ここに腰懸けてゐるのも堪へられないほど眩しくつて、幾度椅子を移したか知れなかつた。しかし、私の話はこの櫻のことから始まるのではない。

あはれにも夢見るひとの凭る椅子は脚もあやふくなりにはけるかな

ああ日毎櫻の園をおとづるるそのならばしの悲しかりけり
君とこそ春の愁をかたらめと云ふひともなし世さへ厭へば
わかうどは櫻を見ても悲しめり君のことなどおもひ出でぬと

或る日の夕暮である。私はいつもよりも晩くここに來たので、何となく落着かぬ心持で珈琲を啜りながら、往來の人々を眺めてゐた。櫻の花はもうすつかり淡紫にたそがれてしまつて、その間には青白い瓦斯燈の光が悲しげに瞬き始めてゐる。今まであなたの樹蔭を漏れて來た救世軍の路傍演説の聲も止んで、一臺の馬車が轍の響を高く立てて過ぎた後は、しめやかに吹いて來る風とともに、ひとしきり花が散るばかりであつた。何と云ふ寂しい春の夕であらう。私はまるで異邦の客のやうな悲哀を感じながら、ひとり悩ましげな沈黙を續けてゐる時、突然二人の若

こゝにも豊かな感覺的表現の一例がある。

爽快な心持を
興へる歌。

い女が私の前に現はれて来たかと思ふと、軽く會釋したまま靜かに傍を
通り過ぎたのである。

珈琲の香にむせびたるをかしさに一人笑ふも春なりしかな
黄昏の薄あかりよりはかなきはなしと思ひぬまして春の日
しみじみとももの哀れを思はする春のゆふべの薄明かな
櫻みなうす紫となるころをたそがれどきと名づけけらしな

二人は展覽會の歸り路らしく、繪畫や彫塑の話をしてゐるのが、衝立
越しに明らかに聴こえて来る。もう全く夜になつてしまつて、埃及風の模
様を描いた衝立にも、黒い斑のある大理石の卓子にも、電燈の光が眩く
輝き渡つてゐる。私にはあの大きな銀のさもわるがこの時どんなになつ

かしく思はれたであらう。私は長い間その方を眺めながら、珈琲の煮え
る音を聴いてゐたが、不圖目をそらしてその傍の壁を見ると、そこに
は一面の大きな鏡が懸けてあつて、二人の女の姿は鮮かにその中に映つ
てゐた。

春の夜に口吟
んでみたい歌
の一つ。

夜となりぬひとしほ春のここちしてなまめく闇を見入るなりけり
黒髪のごときいろかな夜を見てかくかこつ子もをかしからずや
さもわるはしろがね色に光りたりそれを凝視むる春のこころよ
喫茶店のまへの櫻も咲き出でて彌生ついたち夜となりにけり

二人の女がさつき私の傍を通り過ぎた時には、唯幻のやうに思はれ
たばかりであつたが、今は明らかにその姿を眺めることが出来たのであ

新鮮な興味を
求める心。

る。私は更に一杯の珈琲を命じるとともに、鏡を見るのに最も適當な場所を選んで私の椅子を移した。この時女給仕達は目を見合はせて笑つたけれども、私はそんなことには気が付かないやうな様子で、鏡の方ばかり凝視めてゐたのである。

女は二人とも美しかつた。もう二人ともに二十四五にもなるであらうか。濃艶な化粧と華美な服装の爲めに、年よりはすつと若く見えてゐる。さうして二人とも金縁の眼鏡を懸けて、束髪そくはつの形のものものしいのは、一體何をする女なのであらう。女優か、音楽家か、いづれは舞臺の上うへに立つ人であらうと、私はひとりで心に極めてしまつた。

春は來ぬものを悲しむわかうどもさすがにこころ躍らざらめや

春は春秋は秋としてそれぞれにものを思ひぬうらわかき子は

鏡よりかなしきものの氣勢來る夜となりわれも涙するかな

瞳まづ誘はれ遂にこころまで誘はれぬかの女のために

もう往來の人々もなくなつてしまつて、道には雪のやうに花が散つてゐる。女給仕はさもわるの傍で居睡を始めてゐるが、二人の女客はなかなかその饒舌を止める様子もない。時々は佛蘭西語などを交へながら、辛辣な批評を展覧會の繪畫や彫塑に下してゐるが、私はこの時はからずも自分の名が一人の女の口に上るのを聽いて、思はず耳を澄ましたのである。

『まあ、あなたはあれを如何お思ひになつて。』

『さうね。何て云つたら好いでせうね。私は今までにあんな醜惡を極めたものを見たことがありませんもの。』

身體も溶けさ
うな春の夜の
一光景であ
る。

この言葉を聴くと同時に、私は荒々しく椅子から立ち上らなければならなかつた。

ほのかなる櫻あかりを身に浴びて一夜さまよふわれにやはあらぬ
 狂ほしく石を刻むとなやましく君を思ふといづれ悲しき
 かなしくも女のためにうとまれてあるゆる石を切りてある身か

しかし、私は鏡に映つてゐる二人の女の姿が目に入つた時、急に心が鎮
 まるやうに感じられて、再び徐に椅子の上に腰を下した。さうして新し
 い煙草を兜兒から取り出して、さりげない様子で火を點じたけれども、
 さすがに燐寸摺る手は微かに顫へてゐたのである。

『復讐。さうだ。それには如何したら好いだらう。』

私はこんなことを考へながら、何處を見るときもなく窓の外を眺めてゐ
 た。さうして丁度煙草が燃え盡きやうとした時、私はひとつの復讐の方
 法を思ひ付いた。

肩は肩をもて目は目もてむくいよと君も云へりしものを
 いかにかせむかにかくにわれ惑はれつこのうつくしき仇敵はも
 さりけなく煙草吸はむと燐寸を摺る手こそわななけ戀ならなくに
 ややありて煙草の火消え恨消えかなしさのみが残りけるかな

私は直ちに兜兒から寫生帖を取り出して、慌ただしくその一枚を引き
 裂いた。さうして卓子の上にそれを置いて鏡に映つてゐる二人の女の顔
 を描き始めた。私は何時かもう樂しげに口笛を吹きながら足拍子を軽く

輕爽な惡戯、
いかにも春の
夜に思ひつき
さうなカルケ
チニア。

取つて、復讐と云ふことなどもまるで忘れてゐるやうな様子だつた。さうしてその時紙の上に眼鏡を懸けた二匹の猫が描いてあるのを見た人は、きつと笑はずにはゐられなかつたらう。この二匹の猫の顔は、あの二人の女の顔に似てゐるのだから。

私はこの漫畫を後であの二人の女に渡すやうに、女給仕に吩咐けて置いて、この喫茶店を立ち去つたのである。

人はみなこころ浮るる春の夜にわがたはむれの悲しいかなや
口笛を吹けば愁をわするるとまたしてもわれは口笛を吹く

ああ女無残のことを笑みするものと知るよりのろひ初めにき

彫刻家はかう話し終るとともに、高く笑ひながら云つた。

『しかし、何故だか僕はその女を、何時までも忘れることが出来ないのだ。』

さうすると一人の背景畫家が滑稽な顔付をして、

『その女を二人ともにかい。』

と云つたが、彫刻家は唯微笑したばかりで何とも答へなかつた。

晩夏の宵は更けるのが早く、公園を逍遙する人も疎らになつて、この喫茶店の中でも唯電氣扇の響ばかりが高くなつた。靜かな沈黙が続いた後で、彫刻家は悲しげな調子で云つた。

『僕はそれから製作が出来なくなつたのだよ。』

珈琲のほひにさへも酔ふひとの戀いかばかり悲しかるらむ

夏の夜はやくも更けぬ戀がたりひとつふたつを語らふひまに

フランスの作家の手にでもなつたやうな作品である。

戀物語といはずに、傳説といつたところに、この一篇の二つながらの興味がある。

かなしげに電氣扇のすすり泣く夏の夜半ともなりにけらしな

蜥 蜴

これは新しい傳説である。戀物語と云ふ程のものではない。先づ女主人公の身の上から述べて置かう。

女は或る老いたる子爵が、その嬖女に生せた私生兒で、その母とともに郊外の家に住んでゐた。二人はまるで世間から離れて、哀れにも悲しい時を送つてゐた。女は時々この灰色の家を訪れる父を見る毎に、何故だか恨めしくばかり思はれて、言葉を交はすのも稀であつた。女は心密かに自分達のことを思つた、こんなに寂しい人々が何處にあらうかと。

郊外の親子ふたりのわびすまひ隠れ家ながらこすもすの咲くうらわかき女はいかになしみをおほえけらしな灰いろの家その女眉を曇らせおもへらくわが身にましてかなしきはなし

女が十九になつた時、老子爵は卒中で死んでしまつた。さうしてその家はその頃主獵官を勤めてゐた長子が嗣ぐことになつた。この單純な青年貴族は、父にこんな戀の秘密があるのを知らずにゐたから、女と母とはもう灰色の家にも住むことが出来ないで、遠い國に移らなければならなかつた。

母の故郷は善知鳥鳴く北國の海邊にあつた。小さな汽船から降りた女は、歎歎のやうに悲しい潮の響を聞きながら、長い間岸に立つて海の方を眺めてゐた。雪の翼、浪の膚、重く海を壓す鉛いろの天空は、どんな

に頼なく女の目に映つたであらう。岸近く纜つた勇魚船の舷窓から顔を出して、嘲り始めた羽指等の濁聲に驚いて、女が母とともに海を見棄てたのは、もう黄昏に近い頃であつた。

北國のものがたりなど母に聴くあはれに悲し善知鳥やすかた
あはれなる女よ遠くかしま立つ朝の狭霧を憂しとおもふや
ああ汽笛それもかの世のひびきなり悲しき船よながくわかれむ
灰いろの大空を見てたたずみぬわが身のうへに思ひくらべて

二人は最初に海丹を商つてゐる老媪の家を尋ねた。薄暗い肆の中に入つた時、女は肉桂よりもやや淡い匂が漂つてゐるのを感じて、微かに幼き日を思ひ出したのである。なつかしき雲丹のほひよ。七つになるま

單に追憶を述べるといふに止まらずに、物の臭ひを配することによつて僅かの部分でも實感化してゐる點を見るべきである。

でこの海邊の街で育つた女は、夢よりもはかなき追憶の多くを持つてゐた。さうしてもうその追憶の跡も次第に消えて、残り少くなつてゐる中に、この雲丹を賣る肆も交つてゐるのである。
女は涙を誘はれるやうな心持で、長い間雲丹のほひの中に立つてゐた。

悲しきは海邊の街のゆふまぐれさむき夕日に羽蟲むらがる
雲丹を賣る媪がかたる戀がたりむかしがたりに秋の夜は寐む
なつかしき雲丹のほひよ夢の香よながく消ゆなと願ひけるかな
思ひ出もいつかはかなくなりぬらむあはれに悲し人の世のこと

女はその母とともにこの老媪の家に淹留することとなつた。老媪はこ

いよく執拗
な冬を送る前
の自然の豫
告。

の二人の爲めに海に向つた二階の一室を貸し與へた。冬の始まるのを知らせるやうな風は、日毎にこの部屋の古障子を鳴らして吹き過ぎた。時々この二階へまで青白い光を投げ懸ける燈臺の灯は、何時か悲しげに瞬くやうになつた。あの港口の邊りに荒れ狂つて居る北海の渦潮は、近付いて来て冬を待ち構へて、どんなに烈しく叫んでゐることであらう。

女は身を震はせて冬の來るのを怖れた。老媪に代つて肆に坐つてゐる時でも、往來を急ぐ人々の見慣れぬ表のみが目に付いた。さうしてあの寂しかつた郊外の生活さへも、今は樂しかつたもののやうに考へられた。或る日女は老媪とともに雲丹を碎きながら云つた。

『ねえ、お婆あさん。ここの冬はするぶん寒いでせうねえ。』

海越えて冬來るらし汐風のこのごろ寒くなりもまされば

雪と女。

北海の夕焼空のうすあかりほのかに君にさすもはかなし
渦潮の渦巻くままに夜は更けぬ君のねむりもさびしかるらむ
雲丹の刺抜きつつ媪かたるらくわがたをやめは冬をきらふや

雪が幾日も降り續いた。街は何時か雪の中に埋まつてしまつて、家はすべて墓のやうに白く寂しく横はつた。廢市を思はせるやうなこの街の冬を眺めて、女はどんなに悲しげな眼差をしたであらう。時々微かに瞳を射る薄日にきらめく雪の光は、女のはかない喜びであつた。女はその光を見る毎に、自分の胸まで明るくなるやうに思つた。さうして心の底から湧き出したやうな聲で、

『まあ、嬉しいこと。』

と云つて、樂しげに微笑を洩らすのであつた。

音もなく降る
雪、人知れず
積る女のかな
しみとが興味
多い對照をな
してゐる。

乙女の心のや
り場のない愛
爵が出てゐ
る。

雪降りぬいとしめやかに雪降りぬ君がかなしみ降るがごとくに
冬の日の街をひそかに差しのぞく女の顔もたそがれにけり
街はみな雪の下にやなりぬらむあはれや人の子の夢もまた
いま君がひとり思ふは雪あかりそれよりもなほはかながること

一月の後には女はもう雪に倦きてしまつた。街を見るために窓に近付くことも稀になつた。爐の傍に靜かに坐つて、黙つて燃える火を眺めてゐる時が多くなつた。さう云ふ時には女は何を思つてゐるのであらう。何を戀ふると云ふこともなく、ただ人なつかしさに堪へないで、とりとめのないもの思ひに耽つてゐるのである。老媪と母とがいつも話し合つてゐる、夢のやうな昔がたりを聽いてさへも、女は涙を流さずにはゐら

れなかつた。

雪は次第に深くなつた。さうしてそれとともに女の心の悲みも、次第に深くなつたのである。

雪見ればかなし見ざればうらさびし冬疾く往ねと思ひ初めける
かなしげに爐の傍にすわる時古錦繪をふとおもふ時
北國の冬がつくりしものがたりいとどかなしく夜は更けにけり

女はこの老媪から或る荒誕な物語を聽いて、何だかその中に出て來る娘が、自分のやうに思はれてならなかつた。それからと云ふものは、夜毎に老媪にその物語を繰り返させた。吹雪が烈しく戸を打つて、海の遠鳴が凄じく響いて來る夜などは橋の鈴の音たえだえに、老媪の口から洩

れる怪しい言葉を、女はどんなに胸を躍らせて聞いたであらう。その物語と云ふのは、唯若い男と女とが戀に死んだと云ふだけのことであつたけれども。

冬の海遠鳴たかくなりまさる夜はきたりぬ遂に君にも

渦巻きて吹雪は街をはしるらむ街をはしりて海に入るらむ

橋ひとつ鈴を鳴らして馳せ去りぬかくてにはかに更けし冬の夜

老嫗は語りをはりてかこつらく怖ろしきかな戀と云ふもの

かくてこの女の身の上にも、悲しい戀の出來事が起つた。或る日の黄昏であつた。何處からともなく雪を衝いて來た一臺の橋が、鈴の音高くこの街に入つたかと思ふと、はからずもこの雲丹を賣る肆の前で覆へつ

ある一つの機
會は、若い女
の前に、運命
のやうに現は
れた。

た。さうしてその橋に乗つてゐた一人の青年は、激しく雪の中へ投げ出された爲めに脚を挫いて、止むなくこの家の戸を敲いたのである。

この青年はまだ新しい理學士で、ここから十里ばかり離れた街にある、或る測候所へ赴任する道であつた。しかしこの不慮の禍に遭つても、青年はあまり多く悲しまなかつた。脚の全く癒えるまでこの家に留まることになつたので、はからずも美しい女に看護られることを喜んだから。

灰いろのこころを持てる女にもまたあはれなる戀はありけり

しみじみと女ごころにも思ふ雪のゆふべとなりにつらしな

橋の鈴はけしく鳴りぬ冬の夜やいま迫り來と云ふがごとくに

ゆくりなく相見ることのうれしさよ二人かたみにかこちけるかな

女もまたこの青年を看護るのが喜はしかつた。さうしてこの薄暗い家
 の中が、急に明るくなつたやうに思はれて、もう爐の傍に坐つても思
 ひに耽ることもなくなつた。冬はまだなかなか終らうともしないのに、
 女の胸には早くも春が來てゐるのである。

女は始めてこの青年に會つた時のことを思つた。またいつもの物語を
 あの老媪が話すのに耳を傾けながら、靜かに燃える爐の火を眺めてゐる
 時、いつもよりは烈しく鳴る橋の鈴が、次第に近くなつて來るのを聴い
 た。さうしてその響はこの家の前で急に止んで、暫くすると慌ただしく
 戸を敲きながら叫ぶ者があつた。女が戸を開けると、吹き込んで來る粉
 雪とともに、馭者に扶けられて入つて來たのが、この青年だつたのであ
 る。女は色蒼ざめたこの青年の顔を見て、先づその美しいのに胸を躍ら
 せたのであつた。

雪に蔽はれた
 凍港の月夜が
 簡潔に寫され

わかうどとわかき女は人の世の掟のごとく戀に落ちにき
 ああ爐の火昨日にましてあたたかく燃ゆるものかなひとを思へば
 冬の夜の戀がたりよりあらはれしわかうどなればうつくしきかな

青年の脚はもう殆んど癒えた。さうして女と別れなければならぬ時
 が近付いて來た。青年の方ではあんまりそのことを悲しまなかつたけれ
 ども、女の方ではどんなにそのことを悲しんだであらう。まるで夢のや
 うに一月を過ぎしてしまつて、もう別れる時が近付いて來たかと思ふと、
 つくづくと戀のはかなさが嘆かれたのである。

或る夜めづらしく雪が歇んで、月光が美しくこの街を照らしたことが
 あつた。女は青年と唯二人二階から海を眺めながら、悲しい物語に耽つ

てゐる。

てゐた。堅い氷の張りつめた港の中には、雪に鎖されたままひと冬過す五六隻の船が、まるで死んだもののやうに一所に集まつてゐる。さうしてその檣の周りを飛び廻つてゐる鷗の群は、絶えず悲しげに鳴きながら、月も凍てよと叫んでゐるのである。二人はその聲を聞きながら、どんな物語に耽つてゐたのであらう。

うつくしさいづれと君は思ふらむ月の光と雪のひかりと
雪しろく月の光にかがやくを夢のごとしと思ひけるかな
冬の夜は鷗のこゑもうらがなしまして月光させばほのかに

その夜から七日の後に青年はこの家を去つた。雪はすっかり止んでゐるが、黎明の風はまだ烈しい寒さを吹き送つた。女は戸口に立つて橋に

乗る青年の後姿を見送つてゐるが、もうその時は涙も出ない程思ひ疲れてゐたのである。鞭の音が高く響くとともに、橋は徐かに走り始めた。さうして次第に遠ざかつてゆく鈴の音を、女は何時まで何時までも聴いてゐた、それがもうすっかり消えてしまつてからも。

その翌日から雪は再び降り始めた。女は再び爐の傍に坐つて、燃える火を眺めてはもの思ひに耽るやうになつた。さうして不圖何時だかあの青年が、何かの話からして、

『こつちには蜥蜴がゐないんだね。』

と云つた言葉が思ひ出された。この時青年の目には、切なる回想の情が現はれてゐたので、女は嫉妬の念に堪へられなかつたのである。女は思つた、きつと今までのたと云ふ南國の野邊を、その戀人とともに歩いた時、草蔭から走り出る、蜥蜴に驚かされたことを思ひ起したのであらう

てゐる。

てゐた。堅い氷の張りつめた港の中には、雪に鎖されたままひと冬過す五六隻の船が、まるで死んだもののやうに一所に集まつてゐる。さうしてその櫓の周りを飛び廻つてゐる鷗の群は、絶えず悲しげに鳴きながら、月も凍てよと叫んでゐるのである。二人はその聲を聞きながら、どんな物語に耽つてゐたのであらう。

うつくしさいづれと君は思ふらむ月の光と雪のひかりと
雪しろく月の光にかがやくを夢のごとしと思ひけるかな
冬の夜は鷗のこゑもうらがなしまして月光させばほのかに

その夜から七日の後に青年はこの家を去つた。雪はすっかり止んでゐたが、黎明の風はまだ烈しい寒さを吹き送つた。女は戸口に立つて橋に

の乗る青年の後姿を見送つてゐたが、もうその時は涙も出ない程思ひ疲れてゐたのである。鞭の音が高く響くとともに、橋は徐かに走り始めた。さうして次第に遠ざかつてゆく鈴の音を、女は何時までも何時までも聴いてゐた、それがもうすつかり消えてしまつてからも。

その翌日から雪は再び降り始めた。女は再び爐の傍に坐つて、燃える火を眺めてはもの思ひに耽るやうになつた。さうして不圖何時だかあの青年が、何かの話からして、

『こつちには蜥蜴がゐらないんだね。』

と云つた言葉が思ひ出された。この時青年の目には、切なる回想の情が現はれてゐたので、女は嫉妬の念に堪へられなかつたのである。女は思つた、きつと今までのたと云ふ南國の野邊を、その戀人とともに歩いた時、草蔭から走り出る、蜥蜴に驚かされたことを思ひ起したのであらう

「燈臺の灯も消えるかと危ぶまれる夜」といふ一句は、その夜の不安と凶事とを暗示するに十分である。

と。

いまここに長きわかれと死といづれえらぶと云はば何とこたへむ
鈴の音は次第次第に遠ざかりふたたび君の橋のかへらぬ
おもひでははやくも胸に湧くものかわかれていまだ一時ののち

女はこんなことを思ひながら幾夜を過ぎた。吹雪が烈しく街の中を狂ひ廻つて、燈臺の灯も消えるかと危ぶまれる夜である。女は遂にその家から忍び出して、ひたすらあの鈴の音の消えた方に向つて走つた。夜が明けて凍え死んだ女の死骸は、この街から三里ばかり離れた谷間で見出された。女はこの荒海に臨んだ寺に葬られた。さうして小さな墓が汐風に吹かれながら立つた。

春が来た。さうして雪が解け始めた。南國でなくては見られぬと云ふ蜥蜴が、この墓の中から生れて、次第にこの海邊の街にも廣がつて往つた。今でもこの街の人々は、蜥蜴と云ふ名を知らないで、唯その女の名を付けて呼んでゐると云ふことである。

戀に死ぬ女はかなしむかしより多くはわかろうつくしきゆる
北海にのぞめる墓がつたへたるこのあはれなるものがたりかな
かなしげに鷗は鳴きぬあたらしき海邊の墓よ何を思ふと

接吻是非

私が初めにこの題を選んだ時は、接吻に就て短い評論を試みやうと思

つてゐたのである。しかし、今は唯この小さな物語を述べるのに留めて置く。これとても何も接吻を是非することを、恥ぢたからと云ふ譯ではない。

かくて私のこの小さな物語はまた避暑地の夏のことから始まるのである。

かへりみてひそかに思ふいくたびのそのくちづけの長し短し

かにかくにいづれと選びかねにけり夏のくちびる冬のくちびる

ああ避暑地われの心のふるさともこの頃いたく荒れにけらしな

夏の海は黄金のやうに輝いて、烈しい日光が水の面に漲つてゐる。潮を浴びてゐた人々もあまりの暑さに堪へられないで、多くは家へ歸つて

放肆な心を喰
る夏の眞晝時
の氣分が、自
然に描かれて
ゐる。

しまつた。残つてゐるのはいつもの私の一群ばかり、浪の戯れに疲れると、慌ただしくも陸に駆け上つて来て、焼砂の上に身を横たへながら極めて放縱な話に耽り始める。沖を走る白帆も喘ぐ眞晝時、燃えるやうな南風に膚を吹かれては、このやうなことでも語り合ふにはゐられまい。

一人の男は突然情熱に富んだ聲でかう叫んだ。
『君達は接吻と云ふことを如何思つてゐるのだらう。』

いとほけしき光みなぎる夏の海その海かなし見るに堪へねば
わかうどの心燃え立つ夏は來ぬ戀にこころも狂はざらめや
われを吹きわが君を吹く南風いくつの戀を吹きて來にけむ
くらづけのよしあしなどを語り合ふことさへ夏と思はれしかな

何ものにも捉
はれない壯快
な夏を髣髴す
る歌である。

避暑地に適は
しい點景。

男は口々に接吻のことを語り始めた。或者は夢見るやうな眼差をして、遠く海のあなたを眺めながら、豊かなその回想を樂しむものもあつた。また或者は悲しげに額を曇らせて、傍の砂を弄びながら、痛ましいその追憶を歎くものもあつた。さうしてその後には惱ましげな沈黙が長く續いた。

潮は次第に満ち始めて、浪は私達の直ぐ傍にまで迫つて來た。白馬に跨つた外國人の夫婦連れが岬の方から渚傳ひに走つて來たが、私達の一群を認めると、二人は顔を見合はせて微笑しながら、鞭の音高く過ぎ去つてしまつた。

くちづけと言へば微笑を洩らすかな夢を見る子も夢を見ぬ子も
おもひでははかなし指のあひだより握りし砂のこぼるるがごと

戀がたりなかなばならぬに潮満ちぬかなしみ砂を嚙みて來りぬ

女はこの時何か呷き合つてゐたが、急に黙つてしまつたかと思ふと、意味ありげに顔を見合はせて笑つた。さうしてその後には再び惱ましげな沈黙が長く續いた。

見渡すかぎりの焼砂からは、陽炎のやうな呼吸が立ち騰つて、松林の上に見えてゐる旅館の旗章も、狂はむばかりに烈しく翻つてゐる。黄いろく輝いてゐる岬の影が、鮮かに水の面に映つて動かないのも、何となく夏の眞晝の暑さを思はせるのに、直ぐその傍には火のやうに灼けた海堡の白壁が現はれてゐて、見る人の目を眩めかすのであつた。

この時誰であつたか男の中の一人が、私達の中で際立つて若い一人の少年に尋ねた。

蒸されるやう
な官能描寫。

「君はまだ接吻と云ふことを知らないのだらう。」
さうしてこの少年は微笑しながら軽く頷いたのである。

くちづけを好むやと問ふをかしさに女は笑ひくづれけるかな
わかうどがほしいままなる戯れにその日その日を送れるも夏
黄に光る岬のいろと眞白なる砂のいろとを忘れかねつも
くちづけを知らざるひとの悲みも夏の日なればをかしかりけり

この言葉はどんなに私達を喜ばせたらう。私達はこの少年に向つて極
めて誘惑的な調子で接吻と云ふことを説いて云つた。火のやうに燃えた
肩の歌。それは戀の炎が靈魂を熱き盡すまで絶間なく聞える生命の聲
である。少年は微笑しながらその言葉を聴いてゐたが、その瞳には謎

非是吻接

奔放な情欲を
唆つてやまな
い歌。

戯れといふに
は、あまりに
思ひかけない
戯れである。
罪といふには
あまりに美し

のやうな情火のひらめきが、何時か微かに現はれてゐたのである。

この時女に向つて、
「誰かこの男に接吻をしてやらないか。」と叫んだ者があつた。

項巻くちびるを吸へとばかりに心を誘ふ海のにほひよ
情火燃ゆ狂ほしきかなわかうどは眞晝も夢を見る子となりぬ
なにゆゑにわかき命の路をゆく子はかくばかり悲しけなるや

岬のあなたの要塞の方から、實彈射撃の大砲の響が、重い夏の空気を
鈍く動かして、いと懶うけに聴こえ始めた。それと同時に私達も砂から
起き上つて、再び浪の戯れに耽り始めた。さうして遂に私達は女の中か
ら最も美しい一人を選んで、強ひてこの少年に接吻をさせたのである。

い罪である。
こゝにのみ、
自由無碍な若
い心を許すが
い。

夏の燃え立つ
やうな情調を
十分に描き出
した巧みな一
篇の叙事詩。

漂泊の旅路—
といへば、最
早それ自らに

ああ、眞晝。私達は烈しい夏の日光を浴びながら、再び潮の中へ躍り込んで往つた、叫びながら、歌ひながら、さうして追つたり追はれたりして戯れながら、まるであのとりいとのやうに。

おもしろき夏の眞晝の戯れを考へし子に接吻をあたへむ
わかうどよその第一のくちづけの熱くつよきをなどてかなしむ
夏の海よく戯るる一群はとりいとんかと云ふは誰が子ぞ

羽指の歌

三年は過ぎた。

山を下つてからまた都に來て放縱な生活を續けてゐた私は、何時か再

一種の哀愁が
味はれる。

び鬱憂を感じ始めるとともに、海豹遊ぶ北海を差して漂泊の旅路に上つたのである。さうして私が或る大きな海峡を渡らうして、荒廢した北國の港街まで來た時は、もう冬も半を過ぎてゐた頃であつた。定まつた航路も途絶えてゐたので、丁度出帆しやうとしてゐる捕鯨船があるのを見つけて、漸くそれに便乗することが出來たのであつたが、それが爲めに私は再びこの物語の中の人とならなければならなかつた。

鷗も眠る夜半であるから、街の灯もすっかり消えてしまつてゐる。私の乗つた小さな舢舨は、徐かに早頭を離れるとともに星明りの漂つてゐる夜の海を進み始めた。あまりの寂寞に堪へかねて、私は屢船頭に話し懸けたけれども、何時も黙つてその口を指差すのは、大方啞だと云ふことを示すのであらう。

灯の輝く都の
夜の思出が多
いことであら
う。

あゝ三年戀のなき日を送るだにいとあはれなるわれと知らずや
ただひとり都に住めばわかうどのころもさすが寂しかりけり
戀を棄てみづからを棄てかなしくも北海にまでさすらひて来し
はるばるとわが来し方を思ひしは鷗もねむる夜半なりしかな

小舟は遂に沈黙を乗せて走つた。水の面に映つてゐる星の影を碎きな
がら、艣の音は次第に高く次第に急に響き渡つた。海を越して来る冬の
風は、冷たく私の頬を吹いて、私は更に深く漂泊の悲哀を感じた。さう
してこの老いたる啞の船頭が、黙つて艣を操つてゐる姿を見ては、
『私はこれから何處へ往くのだらう。』
と、幾度悲しげに呟いたか知れなかつた。

私が捕鯨船に着いたのは、それから間もなくのことであつた。私が舷

暗い夜と啞者
の船頭との對
照は、戯曲的
な聯想をさへ
誘ふ。

梯に登らうとして甲板の方を見上げると、そこには欄干に凭つて私の方
を眺めてゐる二三の人影があつた。それ等の人々は何ごとか耳語してゐ
るらしいので、何となく不安を感じながら、私は危うげに舷梯を登り始
めた。さうして舷梯を登り盡くして振り返つて見ると、もうそこにはかの
老いたる啞の姿は見えないで、次第に遠ざかつてゆく艣の音ばかりが微
かに聴こえた。

北海のさすらひびととなりにけり戀を悲しと知り初めしゆる
冬の風かなしつめたしあはれなるさすらひびとのわれと思へば
かなしげに星もまたたく冬の夜に船出する子をあはれと思へ
北國の冬のみなどの星あかりほのかなりしも忘れがたかり

意外な光景が
展げられた。

『おや、君は如何してここに來たのだ。』

私はこの聲を聴いて思はずそこに立ち竦んでしまつた。それはまさしくあの中尉の聲である。何時か私の所へ捕鯨船の砲手の娘だと云ふ女から、この中尉が九人の水夫に捕へられて何處ともなく連れて往かれたと云ふことを知らせて來た。私はそのことを半ば疑つてゐたのであるが、今日の前に立つてゐる彼を見て、その變り果てた姿に驚いたのである。あの華やかな軍服を着て、拍車を勇ましく鳴らした姿は何處に見ることが出來やう。今では唯一人の哀れな勇魚取に過ぎない。

私は彼と顔を見合はせたまま、何時までも甲板の上に佇んでゐた。泉のほとり、湖の上、あの山で起つたさまざまの出來事が、走るやうに私の目の前を過ぎた。

哀愁の長い歌

暗い船室の内
部の空氣が、
よく描かれて
ゐる。

いさな船戀のかたきを甲板のうへに見るさへ悲しからずや
銚を取るその手もむかしたをやめの手を取りし手と云ふを忘るな
北國の港にのこる古き代の戀がたりともおもはるるかな

彼は私をその船室へ導いた。船室と云つてもまるで牢獄のやうな荒木造りの狭い部屋である。寢臺と卓子と椅子との外には、調度の類は何もなく、天井に唯一つある小さな窓からは、星明りが薄く差し込んでゐる。彼は暫くの間何か捜してゐる様子であつたが、やがて卓子の上に置いた青銅の臺の上に蠟燭を立てて、慌ただしげに燐寸を擦つた。さうして呼吸の塞がるやうな聲で私に云つた。

『さあ、入りたまへ。天井が低いから、頭を氣を付けないと危いぜ。』
蠟燭の靜かな光は朧けに部屋の中を照らした。さうして黙つてそこに

坐つてゐるうちに、すべてのものが次第に悲しげに見えて来た、壁に懸けた石版畫も、卓子の上の古甕も、さては柱に下けてある短銃までも。

蠟燭のあかりと云へばなつかしやかなしき戀のおもひでのため
 蠟涙がおびただしくも流れたる夜をわすれずと云ふは誰が子ぞ
 星ひとつ窓のあなたにうるみたる光はなつが悲しかりけり
 短銃もものがたらむとするごとし古きむかしの戀のうらみを

私は蠟燭を見るとともに、あの山上の一夜を思ひ起した。ああ、あの夜の月光と霧と、さうして私達の戀語り。ああ、あの夜の美しい騎士が、この私の前に立つてゐる勇魚取であらうか。汐風に吹き晒された顔には、もう若き日の血の色も消え果ててゐる。私は悲しげに彼の顔を眺めなが

ら云つた。

『ずるぶん君も變つてしまつたね。すつかり船乗になつてしまつたぢやないか。』

彼はこの時何と思つたか高く笑つて、強ひて脅かすやうな目付をしたが、腫の底には苦痛の炎が微に燃えてゐたのである。

山の夜はうつくしかりき月光はしろがねのごとく細く顔へて
 戀がたり悲しかりしと云ふべきかうれしかりしと云ふべきかまた
 灰いろの顔をながめてつくづくこのわかうどの冬をかなしむ

錨を巻き上げる音が聴こえ始めた。しかし、彼はそんなことは知らな
 いやうな様子で、何時までも黙つて椅子に腰を懸けたまま、まるで身動

恐ろしいやうな瞬間。

きもしないでゐる。蠟燭の光が青白いその横顔を照らして、死を待つ人のやうにもうの凄惨。私は再び云つた。

『あれからもう三年になるね。その間君はどんな月日を送つてゐたのだらう。』暫くの間黙つてゐたが、また私は語り續けた。

『君が船に乗つたと云ふことは、あの女からの手紙で直ぐ知つたよ。あの女はやつぱりこの船に乗つてゐるのかね。若しゐるのなら一寸會つて見たいやうな氣もするなあ。』

彼はやつぱり黙つてゐる。船はもう動き始めたと見えて、舷側を打つ浪の音が次第に高くなり始めた。さうして船の揺れる度毎に、蠟涙が夥しく卓子の上にこぼれ落ちる。

錨巻き船出の歌をうたふ時月もあらばと思ひけるかな

黒色の闇が
限りなく見え
る。

暗い夜、暗い
海の上で、一
人の男の魂が
あからさまに
すすり泣いて
ゐる。

夜となれば死を待つひと君をまつひとと歎けりおなじ思ひに
ああ三年戀もなくして過ぎし子のその寂しさはいかばかりかは
浪の音のろふがごとく聴ゆるよさばかりものを嫉まれなくに

船はもう港の外へ出たのであらう。櫓を鳴らす風の響に交つて、海鳥の聲が悲しげに聴える。二人は黙つて向ひ合つてゐたが、不圖私が目を上げて見ると、彼は何時の間にか泣いてゐるのである。涙はとめどなく微かに顫へるその頬の上を流れ落ちた。さうして途切れ途切れに彼は云つた。

『許してくれたまへ。僕は君を死んだものとはかり思つてゐたのだ。』船が揺れて蠟燭の火が烈しく瞬いた。『それにあの女ももうこの船にはゐないのだよ。』

鋭い心理が閃
めくやうであ
る。

かう云つてから訴へるやうな眼差で私を見たのは、大方あの女優のこ
とが訊ねたいのであらう。私はさう直覺すると同時に口早に云つた。
『僕はもうあの女とも別れてしまつたよ。今では君と同じやうな身の上
なのさ。』

海の鳥さはな鳴きそね海の鳥ひとしほひとの涙さそへば
ともすればその兜兒より短銃を取り出すひと涙ながしぬ
あらしひは女のことにはじまりぬかくて女のこと終らむ

二人はかくて顔を見合はせて笑つた。しかし、何の爲めに笑つたのだから
分らなかつたので、二人は直ぐ後で戦慄するやうな恐怖を感じた。さう
して再び悲しげな沈黙が長く續いた。蠟燭はもう燃え盡きさうになつて、

脂の溶ける音が狂ほしく響く。

誰だか分らぬが甲板の上で歌つてゐる者がある。何だかその聲は何處
かで聞いたことがあるやうに思はれるけれど、今は如何しても思ひ出す
ことが出来ぬ。皺がれてはゐるけれども、底力のある聲である。さうし
てその歌つてゐる言葉を聴くと、それは悲しい戀人の身の上を歎いてゐ
るのであつた。彼はその歌を聴いて漸く顔を上げた、まるで眠から呼び
覺まされた人のやうに。さうして一人悲しげに呟いたのである。

『ああ、またあの羽指が歌つてゐるな。』

わかうどの涙しとどにながれけむ白蠟の火もしめり靡きぬ
夜は更けぬ浪のひびきも高まりぬ胸の痛みもまさりけらすや
北海の空にかがやく星を見て老いし羽指は何をうたふや

深い憂鬱の高
まるのを思は
せる歌。

昔の戀仇同士
が向ひ合つた
息苦しい光景
は、いよく劇
的に進んで
來た。

どこまでも戯
曲的である。

かかる夜は羽指の歌もかなしやとひとりはかなくかこちけるかな

羽指の歌は途絶えてはまた續いた。時々風の音と浪の響に掻き消されるが、暫くするとまた更に高く聴えて来た。その時私ははからずも心の底に潜んでゐた記憶を呼び起した。ああ、あの聲はまさしくあの眇目の翁である。泉のほとりで聴いた聲も、山火の夜半に聴いた聲も、すべてあの皺唄れてはゐるが底力のある聲であつた。それにあの悲しげな歌の調子を、如何して忘れてしまふことが出来やう。彼は私が思はず驚愕の表情を示したのを見て、

『あれはあの眇目が歌つてゐるのだ。』
と言つて寂しさうに笑つた。

蠟燭が消えると同時に、窓から青白い光が差し込んで来た。如何やら

歌の指羽

深い沈黙の底
から生れたや
うな歌。

荒い北海の船
路が惚げれ
る。

外は月夜にでもなつたらしい。

戀の歌海の歌はた星の歌こよひはすべてかなしがるらむ

寂しくも友は笑ひぬかかるときむかしの戀のことや思へる

ああ月夜おもひ出づるはくちづけかともに流せしあつき涙か

霧は冷たく海を蔽つた。船は絶えず汽笛を鳴らしながら、北へ北へと進んでゆく。海にはもう氷が流れ始めたので、船は幾度かその路を遮ぎられた。私はその間何を思つてゐたであらう。唯一人甲板の上に立つて、夜毎に同じ星を見る時などは、鬱鬱が更に深くなるのを感じるばかりであつた。かくて私は何時かこの船の中で十日あまりを過してしまつた。或る雲降る日の曉である。私は一人の水夫に呼び覺まされた。彼は私

疊みかけるやうな階調の中に、遣り處のない悲哀と焦燥とが味はれる。

心を捉へるものがある。遺書は謎のやうに、われ

に一封の手紙を渡して往つた。

『これはあの男の遺書ですよ。』

さうして彼は冷笑するやうな調子で附け加へた。

『あいつは海へ飛び込んで死んぢまひやがつたんでさあ。』

海ありきおなじかたち星ありきおなじところに七日七夜は戀も死もすべてかしこにありと云ひ北を指差す水夫もありけりしめやかに雲降る日よかかるとき君やいかにとしのぼるかな

私は靜かに彼の遺書を読み始めた。窓から差し込んで來る曉の光は、覺束なくも彼の最後の文字を照らした。

『親しき友よ。否、憎むべき敵よ。予は今或る幻影に惱まされつつ、こ

の處に展げられる。

嚴かな死の前の瞬間が惻々と浮ぶ。

の遺書の筆を取れり。幻影とは何ぞ。いづれはかの山上の戀の名残りなることは、世に唯一人君は知らむ。ああ、三年は夢の如くに過ぎたり。予はまさしく君を殺せしと思ひ狂へるが如く山を下りし時、はからずもかの眇目の翁に出會ひぬ。かくて予は翁の指差す方に向ひて走らざるを得ざりき。予が運命は既にその時定まりしを、今日までは知らざりしこそ愚かなれ。

ああ、死。予は今死を思ひて蠟燭の火を凝視しつつあるなり。君よ、この火の消ゆる時を思へ。』

あかつきは悲しけれなき冬の日をまたも迎ふるものとおもへば
おそろしき銃の煙のまほろしのなかにありける君にやはあらぬ
夢のごと三年は過ぎぬあはれにもかなしきわが世はじまりしより

蠟燭の火消ゆ生命もあやふしとかの短銃のさけぶ夜半かな

私はこの遺書を読み終つてから、長い間黙つて考へてゐた。鬱憂は次第に深くなつた。さうして私はまた死を思ふやうになつた。もう全く夜が明けて、窓からは日光が冷たく差し込んで来た。霧もすつかり霽れたと見えて、船はもう汽笛を鳴らさない。

『死んだつて仕方がない。』

私はかう投げるやうに呟いて、再び彼の遺書を繰り返して讀んだ。さうしてそれを荒々しく兜兒の中に押し込んだかと思ふと、慌ただしく扉を開いて、甲板の方へ急いで往つた、あの羽指の歌の聴える方へ。

夢幻的な極めて劇曲的な戀

涙よりかなしき光差しきたるところにありてものを思へば

物語である。

羽指の歌を背後に聞かせながら、痛ましい消魂の一場が魅力ある油絵のやうに浮んで来る。正にこの作者の獨壇場であるといはればならぬ。

神仙譚にありさうな不可思議な世界が、われわれの前に展げられる「鰐の叔母御」といふ盲目の

たからかに羽指歌へりこれがため冬の日さらに悲しかるらむ
またしてもかなしき戀をものがたる夢見るひとをとがめたまふな

海郷異志

「鰐の叔母御」と呼ばれた盲目の老婆は、今日もいつもの岩蔭に坐つて名も知れぬ海草の實を食べてゐる。

この哀れな「鰐の叔母御」には、息子もなければ娘もない。唯一人で岬の小屋に住んでゐる。年はもう百に近いと云ふことだが、誰が尋ねても答へたことがない。

私とその傍に近付いた時、老婆は蹠音を聴き付けて、急に食へ懸けてゐた海草の實を棄てた。さうして私の方に向いた顔付は蔽つた臉を透し

老婆の異名は
この物語に一
層浪漫的な色
彩を添へる。

傳説時代の夢
幻的な光景が
整調された文
字の上に彷彿
として見える

それでも、よく何でも見ることが出来ることと云ふやうに思はれた。

私が、

『おい、お婆あさん。いつもの話をして聴かせないか。』

と云ふと、老婆は微かに頷いて、また海草の實を取り上げて食べながら
悲しい昔の物語を始めた。

(所々に挿んだ短歌は、私が今老婆の物語を讀者に傳へるに當つて、自
分の感情を叙べただけである。)

一

それはまだ海に多くの水魔が住んでゐて、怖しい口碑や傳説が、霧の
やうに人々の胸を暗くしてゐる時分であつた。その海にはまだ太古を思
はせるやうな鉛色の潮が流れて、あの岬もまるで怪物のやうな形に聳え

「海を怖れ霧
を怖れて……」
は瑰麗な歌で
ありながら、
巧みに戀の哀
れさが封じら
れてゐる。

原始的な生活
が想像される

てゐた。さうして丁度この邊には、數知れぬ程眞黒な岩が簇がつてゐて
狂つたやうに打つ突かつて来る浪が凄じい響を立てて碎けると同時に、
上に眠つてゐた一群の鷗は、假寢の夢を覺まされて飛び立つと云ふやう
な光景を、私はまだよく覚えてゐる。

海を怖れ霧を怖れてやすからぬ頃にも戀は悲しかりけむ
傳説は胸より胸にかなしみを残してゆきぬ風のごとくに
潮みな流れずなりぬ鉛いろかくてこの海遂にほろぶる
岩のうへの鷗の夢も危ふしと思ひて立ちぬ渚ちかくに

私の父は勇敢な漁夫で、日毎に海へ出て魚を捕つてゐた。私の家はそ
の時分からやはりあの岬の小屋だつたが、父はいつも自分の家の事を、

「魚を捕るためではなく、物を捕るやうに思はれて」は空想を唆る

「鰐の御殿」と呼んでゐた。母は私を生むと直ぐ歿くなつたので、家族と云ふのは父と二人きりであつた。父は曉に起きて船を肩にして漁舟の纜つてある所へ歩いて行く。私はその時附いて行く時もあるれば、附いて往かない時もある。附いて往つた時は大抵一所に漁舟へ乗つて海へ出る。

粗末なる岬の小屋にただふたり父子暮らしのあはれなるかな
シメエルを釣るにふさへる姿して老漁夫は往く海のあなたに
曉の銀のやうなる薄あかりかなしく差しぬ子にも父にも

海へ出た一日は多くこんなにして過ぎた。

父は私を舳に近い所に置いて、子守唄のやうな節で謎のやうな事を歌ひながら、網を投げる支度を始める。それが何だか魚を捕るためではなく

形容である。

魔物を捕るやうに思はれて怖しかつた。重い錘が舷に觸れる音が聴え出すと、網を引上げてゐる父の手が微かに顫へる。私は不思議な寶が懸つたのではないかと思つて、いつも驚いたやうに眼を見張つた。かう云ふ事を幾度となく繰り返してゐるうちに日が暮れて、漁村には灯が點き始める。父は怒つたやうな聲で、
『さあ、歸るぞ。また夜が來やがつたんだ。』と叫んで、船の音を高く立てながら、舟を岬の方へ漕いで行く。

船の音はそぞろに人を歎かしむ漕ぐ子はものを思ふならねど
夜となりぬ漁火なども見え初めぬ子は泣き叫ぶ舟は悲しと
海を見て微かに笑ふ戀人がかたみに目をば見合はせし如

希臘の古い物語の一節を讀むやうな氣がする。その聲が岬に反響して嵐のやうに海の上に響き渡る」は殊にさうした感を與へる。

海へ出ない一日は多くこんなにして過ぎた。

私が目を覺ますともう父の姿が見えない。急いで海岸に走つて往くと二三町先の海に舟を漕いでゆくのは父である。私が呼ぶと父が答へる。その聲が岬に反響して嵐のやうに海の上に響き渡る。私は父の舟が見えなくなるまで見送つて、悲しげに家に歸つて往く。さうして唯一人で幼くない空想に耽つて、寂しい一日を暮らしてしまふ。黄昏時になるとまた急いで海岸に走つて往つて、父の舟の歸るのを迎へる。夕闇の中から艫の音が微かに聽えて來ると、私の胸は云ひ知れぬ喜びのために躍つた。再び朝のやうに私が呼ぶと父が答へる。その聲が岬に反響して嵐のやうに海の上に響き渡る。

呼びかはす聲も聽えずなりにけり霧すさまじく流れ來ぬれば

一日はいつしか過ぎぬそこはかとなきおもひでの子供ごころに
たそがれの光は海にただよひぬ神仙譚をおもはすること

白い一面の鏡
それは何を少女の身の上
齎らすのであらう。この一篇の興味はこゝにある。

「うつくしく
なりしも」は、
獨立した歌と
して味つても

私はそのうち十二歳となつた。さうして私の悲しい物語はその冬の終る頃から始まつた。或る朝目を覺ますと父の姿はもう見えなくつて、床の中に一面の鏡が置いてあるのみであつた。私はこの不思議な品物を手に取り上げて、急いで海岸に走つて往つた。丁度父は舟の纜を解いてゐる所だつたから、私はその鏡を差出して喘ぎながら叫んだ。

「お父さん、これが、これが。」

かなしみのみなもとのみ海を知るそれを眺めてなげく少女は
うつくしくなりしも夢のなかのこと怪しと云ひて目覺めたまふな

盡きない趣を
覺える。

謎はまだ解か
れない。描寫
には中世期の
繪畫のやうな
印象がある。

「銀鮫の……」
は作者の短歌
に於ける技巧
的好みを見は
せるものであ
る。

今日の日は浪の音さへ異なりぬそれを聴く身のいかに悲しき

父が鏡を見た時の顔は、驚愕と恐怖とに満されてゐた。長い間二人の
父子は黙つて目を見合はせたまま、舟と岸とに佇んでゐた。老漁夫の眞
白な髯が微かに風に動くのみで、岩に留まつた鷗の群も、飛び立たうと
もしなかつた。しかし、この寂寞は直ぐに父の歎聲のために破られた。
父は岸に躍り上ると同時に、私の手から鏡を取つて云つた。

「ちえつ、また銀鮫が悪戯をしやがつたな。」さうして海の方へ向つて鏡
を擲つた。

おどろきは恐怖を誘ひ来るものか不可思議に會ふ人をおもへば
寂寞は嵐のごとく海に來ぬ鷗も人もともにおそるる

銀鮫の胸の鱗のひとひらを取りて鏡をつくりけらしな

二

腹の白く光る
魚の死骸なぞ
を點出して、
嵐の跡を描い
たのは、空想
味の多いこの
物語を、絶え
ず實感化さう
とするこの作
者の巧みさの
一つである。

志異郷海

「潮黒し……」
は強い一種の
律調によつて

その日は烈しい暴風になつた。岬も岩もすべて碎けてしまふかと危ぶ
まれた程、海は呪ひと怒りのために荒れ狂つた。潮は黒く渦巻いて、幾
度か「鯨の御殿」の近くまで押し寄せて來た。さうしてその潮の引いた跡
には、名も知れぬ醜い魚の死骸が腹を白く光らせて横はつてゐた。この
時父は足にからまる海藻を掻き除けながら、流された船具を拾ふために
走り廻つた。私は岩の上に佇んで浪間に動く父の姿を見守りながら、ど
んなに海を怖れて戦慄したであらう。

ああ遂に暴風となりぬなにゆゑに海はかくまで我をのろふや

嵐の刹那の光
景を十分に詠
つてゐる。

凄愴な氣が迫
る。

潮黒し岩走るかとあやまたるあなやと云ひて海をながむる
手に取れば夢見ごこちになると云ふこがねの魚を見るがかなしさ

その日は一日私は岩の上に立つてゐた。さうして小さな胸から出るだ
けの聲を絞つて、潮の襲つて来る度毎に父に知らせた。父の働きが鈍く
なるに従つて、私の聲も細つて往つた。しかし、暴風は次第に烈しくなる
ばかりであつた。

眞暗な沖では幾度か龍巻が凄まじく立つのが見えた。さうして風のた
めに吹き飛ばされて来た海鳥の群は、みんな断崖に突き當つて死んだ。
私の立つてゐる岩の上にも、時々礫のやうにそれらの死骸が落ちて来た。

渦潮の渦巻くままにかなしみが胸に湧く子のあはれなるかな

龍巻にやがてこの身も襲はれむその時早く来よと云へども
いさぎよく暴風に死にし海の鳥それも涙のたねとなりぬる

父と私が「鰐の御殿」に歸つたのは、その日の黄昏近くであつたけれど
も暴風は猶烈しく吹き荒んでゐた。私達が「鰐の御殿」の入口に立つた時
先づその目には何が映つたであらう。薄暗い家の内部はまるで龜のやう
に静まり返つて、天井の隙間から差し込んでゐる一條の銀のやうな光が
暴風のために顛へてゐるばかりである。さうしてその光の落ちる邊の土
間には、羨の鍋が覆へつたまま置いてあつて、一群の鼠がその周圍に集
まつてゐた。

やがてわが鰐の御殿もたそがれぬ大海かぜの吹くがまにまに

暴風雨に吹き
まくられた人
氣のない屋内
の光景がよく
窺はれる。

一種の鬼氣が感じられる。「見ろ、あすこに今朝の鏡がある」といつて、それから棚の方を指した風を書いた描方には、水も漏らさないやうな力がある。

しろがねの光かすかに胸に差し海の愁もいまは忘るる
誰が子のこの狼籍ぞ涙をば煮るべき鍋も覆へりたる

私達の目は直ぐ暗黒に慣れた。さうして明かに家の内部を見ることが出来るやうになつた。父は手早く燐寸を摺つて蠟燭に灯を點けると、慌ただしく起ち上がつて「鰐の御殿」の中を注意深い眼差で見廻した。さうしてその手に縋つて心細げに立つてゐる私を見ながら云つた。

「見ろ、あすこに今朝の鏡がある。」

父の指差した棚を見ると、今朝父が海のなかに擲つた鏡が、何時の間にかその上に載せてあつた。

家のうち暗く心も暗かりき父子ふたりのあはれなる身は

蠟燭の灯を運命にたとへけりあまり悲しき少女ごころに
ああ鏡のろひを鑄りしもののごとなど怖しき光はなつや

三

目の前に迫つた運命を、讀み知ることに出来る人と、讀み知ることに出来ない人との悲痛な撞着が味はれる

その夜は何時になく父が烈しく私を抱き締めるやうに思はれた。私は眠られぬままにさまざまな事を父に尋ねたけれども、父は黙つて私の顔を凝視めてゐるばかりで、一言も答へて呉れなかつた。さうして何時かその眼に涙さへ浮べて、更に烈しく私を抱き締めた。私がかうとうとと眠り懸けた時、途切れ途切れに呟く父の聲が聴えた。

「明日は如何してもこの子を、あの洞窟へ連れて往かなければならねえのかなあ。」

不可抗な運命を前にして、相擁しつゝ泣き悲しむ父子の心が、慘として憫ばれる

年老いし父が額の皺などを數ふれば夜もかなしきものか
吹き荒ぶ風のひびきも寂しかり夜ごと聴くべき唄を聴かねば
運命のささやきかともうたがひぬ明日のわが身と思ひ知る時

私はその言葉を聴くと同時に、急に歎歎をしたくなつて來た。さうしてなるべく聲を立てないやうに、父の胸に強く顔を押し付けたまま、悲しげに泣き始めた。父はその時苦しげに吐息を洩らして、憐れむやうに私の背中を撫でた。かくて二人は長い間寂寥の中に横はつてゐた。しかし、後では父も私とともに泣いてゐると見えて、熱い涙が幾度か私の顔の上に落ちた。

泣けばなほ悲しさまさり堪へ難しこの悲しみにやがて死ぬらむ

夜は更けぬ海の遠鳴高まりぬわがかなしさもいとどまさりぬ
その吐息またなく苦しその涙またなく熱しかなしいかなや

「これから己が話すことはみんなお前のことのやうだ」は、簡単な一言で、不慮の運命に遭つた父親の心を語り盡してゐる。

私が明日何故洞窟に往かねばならぬかと云ふことを、父に尋ねたのはそれから餘程経つてからのことであつた。私はその洞窟が何處にあるか知らなかつたから、先づそのことを父に尋ねた。しかし、父は唯首を振つたばかりで黙つて私の顔を凝視めてゐた。さうして徐かに口を動かして讒言のやうに私に語つたのは、多くの荒誕な傳説である。父はそのことを語る前に、

『これから己が話すことは、みんなお前のことのやうなものだ。』と云つて、眼を閉ぢて暫く何か考へてゐた。

暗示の多い挿話である。

洞窟のありかやいづこわざはひの島のなかかと問へど答へぬ
 鱧の餌か海の魔物の犠牲かいづれか明日のわが身なるべき
 父の眼に涙ひかりぬ子はそれを凝視めながらに何をおもふや
 傳説はおほかた悲し昔より人の子はみな悲しきものか

傳説の主人公は多く少女であつた。何時とも分らぬ、何處とも分らぬ
 或る海邊の村に鷺の子を孕んだ女がゐた。女はその事を悲しんで殆んど
 氣も狂はむばかりであつた。しかし、生み落して見るとそれは勇ましい男
 の兒で、直ぐ海の方へ歩いて往つた。さうして大きな岩の上に立つて、
 太陽を睨みながら、

「うん、己はこんな所にゐる人間ぢやない。」と云つて急いで家に歸つて
 来て、母を背負つたまま何處ともなく走つて往つた。

鷺の子はいともめでたし人生のものあはれを思ひ知らねば
 太陽はかくやくとしてかがやきぬそをわが家と指すは誰が子ぞ
 翼なく飛びがたき身をかなしみぬかの大空のうへを眺めて

それから十數年経つた。或る日この村に異様の姿をした一人の女が入
 つて來た。さうしてその女は家毎に美しい娘を尋ね歩いた。その事が村
 中に知れ渡ると、その女は妖女としてもう戸口に立つのさへ怖れられた。
 しかし、その女は猶村の中を彷徨しながら、悲しげな歌を歌つてゐた。そ
 の歌は、「わが子の花嫁に、娘をたもれ、村のひと。昔馴染の鷺の妻。」と
 云ふやうな意味なものであつた。さうしてその夜税吏の一人娘がけえな
 くなつた。その女はあの鷺の子の母だつたのである。

描述の筆がいかに美しいか。悲しい傳説が生々と描かれてゐる。

夜もすがら鶏啼きぬうつくしき娘を持てる村長の家
秋かぜは悲しき歌をもたらしめてゆうべ海邊の村をおとなふ
その歌は百年まへのはやりうたあはれひとふし誰に習ひし

何時とも分らぬ、何處とも分らぬ。これもやはり或る海邊の村に海鼠
婆あと呼ばれた一人の飯綱使ひが住んでゐた。その老女が或る時急に顔
色を變へて、丁度來合はせてゐた村民等に云つた。

『岬から九番目の岩に、女の子が死んでゐるよ。』
村民等がその岩の傍に集つた頃、彼等はそこに何を見出したであらう
潮の干いた岩蔭の砂の上には、美しい少女の死骸が、手に海草の房を握
つたまま横はつてゐた。一番後から來た老女は、微笑しながらその少女

巧まないうち
に、どこか妖
氣を感じさせ
る文章である

の胸に耳を當てて、何事かを聴くやうな様子をした。

おそろしき飯綱使ひよ今日もまた少女の髪を煮つつかたるや
あやしくも笑ふ老女の皺唄ごゑまづ冬來ぬと思はるるかな
海晴れぬ干潟にのこる足の跡七尺なるが遠くつづけど

少女は海の魔物が何處からか奪つて來たものであつた。しかし、かの老
女が海鼠を取つてその胸の上に置いた時、魂は再び甦つた。さうして少
女は長くこの老婆の弟子となつて、秘法の座にも列なつたけれども、遂
に言葉を發することが出来なかつた。唯この哀れな少女も歌ふことだけ
は出來たから、「洞窟の奥に隠せる、九個の鬮體は誰が家の姫ぞ。」と、一
日に幾度となく繰り返した。さうしてその聲は毎日悲しげに海を渡つて

妖怪畫のやう
な印象を與へ
る。